

医学部ウォーカー

1面：「弘前大学COI-NEXT Well-beingイノベーションサミット2024」開催
2面：「健康未来イノベーションサミット」開催
3面：「多職種連携とDX技術で融合した東北北の創出」
4面：「多職種連携とDX技術で融合した東北北の創出」
5面：「多職種連携とDX技術で融合した東北北の創出」
6面：「多職種連携とDX技術で融合した東北北の創出」
7面：「多職種連携とDX技術で融合した東北北の創出」
8面：「多職種連携とDX技術で融合した東北北の創出」
9面：「多職種連携とDX技術で融合した東北北の創出」
10面：「多職種連携とDX技術で融合した東北北の創出」
11面：「多職種連携とDX技術で融合した東北北の創出」
12面：「多職種連携とDX技術で融合した東北北の創出」
13面：「多職種連携とDX技術で融合した東北北の創出」
14面：「多職種連携とDX技術で融合した東北北の創出」
15面：「多職種連携とDX技術で融合した東北北の創出」
16面：「多職種連携とDX技術で融合した東北北の創出」



「弘前大学 COI-NEXT Well-being イノベーションサミット2024」開催
学長特別補佐 健康未来イノベーションサミット研究機構構長(拠点長) 教授 村下公一

令和六年二月二日(金)、弘前大学は、弘前市、青森県とともに、シンポジウム「弘前大学COI-NEXT Well-beingイノベーションサミット2024」を開催しました。
まずは開催にご尽力をいただきました学内外の先生方、企画機関の皆様、そしてスタッフとして運営にご協力をいただいた皆様にご御礼を申し上げます。
本サミットは昨年に引き続き、アートホテル弘前シティ会場でのリアル開催およびオンラインのハイブリッドで開催し、国内・海外から約二千二百名の聴講者にご参加をいただきました。
今回はテーマを「弘前COI-NEXT：Well-beingイノベーションPJ最前線Well-beingな地域共創社会を創る」とし、サブテーマを「健康基軸の『経済発展モデル』と『全世代アプローチ』で高GDP&GNHの未来社会実現をめざす」と打ち出しました。

(QOL)の本質的課題解決へ向けてさらなる力強く挑戦し、STI for SDGsの理念のもと、地域から世界の健康づくり(SDGs)への貢献をめざします。
新健康未来イノベーション戦略の実現に向け、未来の地域社会モデル、ヘルスケア産業創出等について第一線の産学官金民間関係者が一大集結し、熱い議論が展開されました。
開会にあたり、福田眞作学長、青森県知事 宮下宗一郎氏、弘前市長 櫻田宏氏からご挨拶をいただき、来賓として文部科学省 科学技術・学術政策局 科学技術・学術政策局長 松尾泰樹氏からご挨拶をいただきました。

基調講演では、私(村下)から「Well-beingな地域共創社会の実現」と題して、これまで中路先生が先頭にたつて率いてこられた弘前大学COIプロジェクトの現在のフェーズでの研究の進捗について講演しました。
特別講演では、経済産業省ヘルスケア産業課 藤岡雅美総括補佐から、「新しい健康社会の実現『健康と価値の再定義』」と題して、ヘルスケア分野における経済産業省の役割などをお話いただきました。

特別企画1「QOL健診を基軸とした地域/職域/学域での取組」では、弘前市 佐伯健康子ども部長、つがる市 成田民生部長から各市での実態に合わせた取組を紹介いただき、ミワ電工 島谷取締役からは健康経営の取組についてお話いただきました。
中南地区連携推進協議会 上野先生、弘前食生活改善推進員連絡協議会 斎藤会長、黒石市 山内教育長、青森県スポーツ健康課 三上指導主事からそれぞれの学域での健康教育について、丁寧な講演をいただきました。

特別企画2「全世代PJ最前線」では、若者が健康未来を変えるには、弘前大学生協学生委員の笹森さん(教育学部二年)が大学生協でのQOL健診の様子などを伝え、続いて本学保健学研究科 齊藤先生から弘前市と連携した研究の社会実装などについて講演いただきました。

特別企画3「経済循環モデル研究最前線」では、東京大学大学院薬学系研究科 五十嵐准教授から社会保障費最適化について講演いただき、DeSCヘルスケア代表取締役社長 瀬川副プロジェクター/社会実装統括および花王特命エキスパート 桂木同副統括に拠点の社会実装についてお話いただきました。
また、ここで科学技術振興機構(JST)COI-NEXT共創分野・地域共創分野 第一領域副POの吉田輝彦先生に、来賓としてご挨拶をいただきました。
特別企画4「デジタルイン戦略研究最前線」では、東京大学大学院情報学環 上村准教授、名古屋大学大学院医学系研究科 中柘准教授、東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科 渡部先生、和歌山県立医科大学 宮井教授から、ヘルスケア・デジタルイン実現に向けたそれぞれの研究の最新の状況をご発表いただきました。

続いて、著名な料理研究家 浜内千波先生から「食分野からみた健康経営の考え方」と題して、社員食堂から広がる健康経営など具体的な事例を含めた講演をいただき、先生のお話に会場は大いに盛り上がりました。

特別企画5「社会実装戦略最前線」では、主要企画企業 明治安田、青森県生協連、カゴメ、ハウス食品、雪印メグミルクや地元のマールマンコンピュータサービス、東北化学薬品など計十

閉会に際し、本学曾我副学長および廣田研究科長からご挨拶をいただき、当シンポジウムは充実した議論を重ね、成功裡に終了しました。
今回のWell-beingイノベーションサミットは、地元弘前市で多くの市民にもご参加いただき、盛会のうち開催することができました。学内の先生方、企画機関の皆様はじめご関係皆様からいただきましたご指導、ご支援にこの場をお借りし改めて感謝申し上げます。まことにありがとうございます。弘前大学COI-NEXT拠点は今後も関係者一同、Well-being地域社会共創の実現に向けて、躍進して参ります。先生方、ご関係皆様には引き続きのご指導を賜りますようお願い申し上げます。

2024.2.2 FRI 13:00-17:15
「弘前大学COI-NEXT Well-beingイノベーションサミット2024」開催
「Well-beingな地域共創社会を創る」



会場の様子



パネルディスカッションの様子

一社の代表がそれぞれの社会実装の状況についてのプレゼンテーションをしました。
最後のセッションであるパネルディスカッションでは、(株)宮田総研代表取締役(株)ヘルスケアイノベーション代表取締役 宮田氏をモデレーターに、COI-NEXT共創の場形成推進会議委員/名古屋大学医学部附属病院 先端開発部長 水野教授をアドバイザーに迎え、最高顧問である中路先生、COI-NEXT拠点の副プロジェクター/医学研究科長の廣田先生、瀬川氏、青森県、弘前市、企業、学生など幅広い分野から総勢十二名のパネリストが登壇し「Well-beingな地域社会づくりへ」のテーマのもとそれぞれの立場から熱心な議論が展開されました。

附属バイオメデイカルリサーチ

センター設置にあたって

附属バイオメデイカルセンター センター長 伊東 健

二〇二四年一月一日付けで脳神経血管病態研究施設（脳研）と高度先進医学研究センター（高度先進）を発展的に統廃合しバイオメデイカルリサーチセンター（BMRc）を医学研究科に設置しました。今年の干支は甲辰です。甲辰は、「成」という芽が成長していき、姿を整えていく」というように縁起の良い年です。この年にBMRcが発足したことを大変嬉しく思います。脳研は昭和四十年に設置された「脳卒中研究施設」に始まる大変歴史のある研究施設です。高度先進にも平成十七年に設置されて以来の歴史があります。BMRcは、脳研と高度先進のこれまでの努力が結晶してBMRcに姿を変えた。そのように評価していただければ幸いです。

BMRcの名前には生物学的理解に基づく医学研究の推進という意味を込めました。例えばメタボリックシンドローム一つを例にとっても、動物が進化させた栄養代謝機能の理解抜きには革新的な医療イノベーションは成り立ちません。BMRcには、専任講座として旧脳研の脳神経病理学、脳神経内科学、血管・炎症医学（旧脳血管病態学）、脳神経生理学の四講座、旧高度先進の分子生体防御学に加え、分子病態病理学、病態薬理学が加わります。また、協力講座として

脳神経外科学が加わり、さらに全学との共同研究を活性化するため協力教員として他研究科から多数の研究者に参加していただく予定です（現在の協力教員は松宮朋徳先生（保健学研究科）、前多隼人先生（農学生命科学部）、森田英嗣先生（農学生命科学部））。前身の高度先進が管理運営していた共通機器施設、プロジェクト型研究施設についてもBMRcがその管理運営を引き継ぎます。センター長は分子生体の伊東が務めさせていただきます。副センター長は、健康未来イノベーション研究機構長／学長特別補佐の村下公一教授、脳神経生理学講座の上野伸哉教授です。センターの具体的な活動としては、まず各講座の持つ研究技術や研究シーズを共有して、基礎研究の活性化を図ります。このため、月に一回の合同プロGRESS会議や三ヶ月に一度程度の外部講師セミナーを若手教員で構成する企画戦略室において企画・運営します。また、大型外部資金を獲得することをセンターの当面のセンターの目標に掲げます。

BMRcの重要な使命は弘前大学COLINEX研究拠点との密接な連携による研究推進です。COLINEXでは、疾患の超早期発見による個別化予防研究を目指し、メタボリックシンドロームや認知症の予防研究を行っています。近年で



見が蓄積してきますので、幼少期からの健康管理・教育にも重きを置いていきます。また、加齢は未病に影響を与える因子として重要です。このような観点から、全世代において遺伝因子と環境因子の双方が加齢や未病に与える影響の基礎研究が重要だと考えています。BMRcでは、COLINEX拠点との連携により

共同研究講座

『デジタルヘルスケアワークスタイル研究講座』設置にあたって

教授 玉田 嘉紀 (医療データ解析学講座)

ビッグデータ駆動型の研究を推進するとともに他学部やCOLINEX参画機関の共同研究講座とも連携し最先端の未病医学研究を行います。これにより、弘前大学の「地域中核・特色のある研究大学」構想の学術研究面において先導的な役割を果たしていく所存です。皆様のご指導・ご支援を賜れば幸いです。

高い関心を持ち先進的な取り組みを行っている企業でもあります。また、株式会社WALCは、製造業のDX化を推進するためのファクトリーオートメーションサービスを提供する企業です。本講座では、製造業をはじめとした様々な職種において、労働者が健康に、よりよい環境で働くための仕組み構築にむけて、デジタルヘルスすなわちAIなどの最新のデジタル技術による健康情報・技術を活用した疾患発症予測モデルの精度検証や行動変容モデル開発、QOL健診の普及等

令和五年（二〇二三年）十月一日付で医学研究科に「デジタルヘルスケアワークスタイル研究講座」が設置されました。本講座はDMG森精機株式会社（東京都江東区）とその完全子会社である株式会社WALC（以下両社含み「DMG森精機」と）の共同研究講座で、同年十一月八日に開設式を執り行いました。開設式には、DMG森精機株式会社からは同社健康管理増進センター

長谷川典男氏が、そして株式会社WALCからは取締役社長の櫻井努氏にご臨席いただきました。講座の設置期間は令和八年九月三十日までとなっています。開設時の講座構成員は、弘前大学からは中路重之特任教授、村下公一教授、伊東健教授、三上達也教授、藤本健二特任助教、私、玉田の六名、DMG森精機からは車谷典男氏、梁川翔吾氏、櫻井努氏、そして東京Dタワーホスピタルから手取屋岳夫氏の合わせて十名となっております。DMG森精機株式会社は世界を代表する工作機械メーカーで、製造業におけるDX（デジタル・トランスフォーメーション）を先導している企業です。また経済産業省と日本健康会議が共同で選定する「健康経営優良法人2023（大規模法人部門（ホワイト500）」に認定されており、社員の健康の維持・増進に

地域中核・特色ある 研究大学強化促進事業

医学研究科長 廣田 和美



医学部ウォーカー166号の研究科長寄稿で「国際卓越研究大学並びに地域中核・特色ある研究大学の設置の背景と大学序列化」について書きました。大学の序列化の波に乗り遅れないために、昨年は「地域中核特色ある研究大学の連携による産学官連携。共同研究の施設整備事業」だけでなく、「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業」へも応募しました。施設整備事業には無事採択されたものの、強化促進事業には令和五年度は残念ながら不採

- ① 客観的かつ多面的なアウトプット・アウトカム指標から大学の研究力を十分に分析していること
 - ② 戦略の実現に向けて学長を中心とした取組が着実に実施されるよう、大胆かつ実効的な計画やロードマップを設けていること
 - ③ 改革について大学全体への波及効果を期待できること
 - ④ 地球規模の課題解決や社会変革に繋がるイノベーションを創出する機能や体制が整備されていること
 - ⑤ 地域社会との実効的な連携の下で地域課題解決に貢献しうる計画となっていること
 - ⑥ 他機関との効果的な連携等を通じて自大学の強みを更に発展させる戦略となっていること
 - ⑦ 戦略の推進に必要なガバナンス体制が整備されていること
- 個人的な感想ですが、我々のCOLINEX事業を基軸とした事業提案は①、②、④、⑤は既に満たして

(前ページより)

いるか、十分良いレベルに
来ていると思っています。
一方で、「③改革について
大学全体への波及効果を期
待できること」について
は、COLNEXT事業に絡め
て、如何に他学部・他部局
に効果を波及させるかの方
略が弱かったかもしれない
と思っています。また、「⑥
他機関との効果的な連携等
を通じて自大学の強みを更
に発展させる戦略となっ
ていること」に関して、
COLNEXT事業で今まで一
緒にやってきた大学とは効
果的な連携に既になつてい
るものの、新たに組んだ大
学との連携が「強みをさら
に発展させる」までの効果
があると審査員に思わせる
ことが出来ていなかった可
能性があります。そして、
「⑦戦略の推進に必要なガ
バナンス体制が整備されて
いること」に関しては、U
RA体制が本学は他大学に
比べると脆弱であり、それ
を補うために、全学的組織
の社会実装推進本部を本町
地区に設置し、社会実装の
実現・加速に向け重点的に
支援することも述べました
が、それだけでは不十分
だったと思われまます。

このため、今年も弱点的
克服を進めて、採択を目指
したいと思っています。今年も
十二・十三大学が採択され
るはずですが、そして採択さ
れば、本学の研究力向上
戦略における中核組織をし
て新たな附置研究所を設置
できますので、世界的な統
合予防医学研究分野の研究
拠点として機能や体制が整
備されることになりまます。
「地域中核・特色ある研究
大学強化促進事業」は英文
では「Program for Forming
Japan's Peak Research
Universities」となり、略称
が「PEAKS」であるという
ことを最近知りました。地
域中核・特色ある研究大学
と言う和名から、地域に密
着しそこで特色ある研究を
行う大学を目指そうとして
いましたが、英文を見る限
り地域の特徴はあまり関係
なく、特に略称の「PEAKS
は日本の頂となる複数の大
学を意味していると思われ
ます。つまり、各地域に国
際卓越研究大学のミニ版と
なる研究大学を置くという
様に捉えた方が良さそう
です。その観点から、「統合
予防医学研究分野の国際的
研究拠点」になるというプ
ランと決意を前面に出す必
要があると思っています。

何れにしても、審査員
は、しがらみを断ち切り既
存の組織とは違う新たな組
織を作ること強く要求し
ているようですので、我々
も痛みの伴う改革を進める
必要があると思っていま
すが、附置研が大きな希望
になるはずはです。

昨年未末から、人事院勧告
対応に伴う人件費の増加、
光熱費単価の高止まりや物
価高騰に伴う財源不足への
対応として教員ポイント使
用制限、地域中核特色ある
研究大学強化促進事業の不
採択、能登半島地震、日航
機・海保機事故と何かあま
り良くないことが続いてい
ますが、今年の干支は甲辰
です。本来は運氣の高
まる年のはずです。です
で、ここからは運氣が上
がると強く信じて進んでい
きたいと思ひます。

皆様、どうか御協力の程、
宜しく致します。

学長再任にあたって

弘前大学長 福田眞作



私の学長一期目は、コロ
ナ禍という有事の四年間
でした。未知の感染症を前
に、冷静かつ的確な判断・
決定を下し、どうかこの
有事を乗り越えることができ
たのは、教職員の皆さん、
とりわけ医学部・附属病院
の皆さんのご理解とご協力
があったからこそだと思っ
ています。まずは、関係す
るすべての皆さんに感謝を
申し上げます。本当にあり
がとうございました。

有事の状況下でも学長就
任時の目標以上の事業で成
果をあげることができたよ
うに思います。たとえば、
COIをCOLNEXTに繋げ、
これを基盤に大型プロジェ
クト「地域中核・特色ある
研究大学の振興事業」に挑
戦することができました。

残念ながら「地域中核・特
色ある研究大学強化促進事
業」は不採択でしたが、先
に行われた施設整備を支援
する「地域中核・特色ある
研究大学の連携による産学
官連携・共同研究の施設整
備事業」に採択され、「デー
タヘルズ社会実装研究セン
ター（地上4F）」が医学
部敷地内にもまもなく誕生し
ます。同センターを研究大
学の仲間入りを実現した象
徴の建物とすることが再任

退職にあたって

学務とともに歩んだ弘前大学での二十年

医学教育学講座 教授 鬼島 宏



一年目の最大のミッション
であり、令和六年度の強化
促進事業の採択を全力で目
指します。また、遠隔医療
も想定を上回るスピードで
進めていただきました。附
属病院独自開発システムを
用いた遠隔透視管理がす
でに稼働し、遠隔ICU管理
や遠隔周産期医療が近々ス
タートし、さらには遠隔ロ
ボット手術の社会実装が目
前にあります。全国に先駆
けた遠隔医療が今後も推進
されるものと期待していま
す。

「世界に発信し、地域と共
に創造する (communicating
to the world, creating with
our community)」の本学の
スローガンは、昨年十二月
にご逝去された第十一代学
長吉田豊先生が定めたもの
です。昭和五十六年に旧第
一内科（吉田内科）に入局
した私にとって、吉田先生
は医師、教授、そして学長
としての師でした。先日、
このスローガン策定時のエ
ピソードを関係者からお聞
きする機会がありました。

「地域と共に創造し、世界
に発信する」の順ではない
かという意見が大半を占め
る中、学生時代に五年間の
米国留学を経験した吉田先
生は、「地方大学でも、教
育・研究を含めすべてにお
いて常に世界を見ずえるべ
きであり、世界に発信し：
が先だ」と頑として譲らな
かったそうです。恩師がス
ローガンに込めた思いを今
一度胸に刻み、次の四年間
を（平時であることを祈り
ながら）務めてまいりま
す。医学部・附属病院の皆
様が獲得した
文部科学省特
別教育研究経
費（二〇〇八
年度～二〇一
二年度）「テ
イチンング・ポ
ートフォリオ
を活用したFD
活動の展開」
の事業にも従
事し、二〇一
二年三月には
弘前大学出版
会から事業と
同名の単行本
を出版するこ
とに至ったこ
とは、大きな
成果であった
と実感してお
ります。

入試専門委員長を務めた
際には、臨時定員増への対
応や入試改革（学士編入試
を含む）に携わりました。
学務委員長となりました際
には、新入生の半数を超え
るようになった地域枠学生
への適切な対応に尽力して
きました。そんな最中、二
〇二〇年から丸三年間の新
型コロナウイルス感染症へ
の対応は、まさに手探り状
態となりました。Web環
境での授業構築は可能とな
りましたが、臨床実習をい
かに対応すべきかの議論が
続きました。弘前大学で
は、パンデミックでの制限
の下ながらもなんとか臨床
実習を遂行することができ



2006年・ダルハウジー大学ワークショップ



2022年・弘前大学表彰（医学研究科・学務の皆さんと）

するたために、
二〇〇六年に
カナダ・ダル
ハウジー大学
への派遣教員
四名のうちの
一人に加えて
いただき、テ
イチンング・
ポートフォリ
オ専門家の認
定も受けられ
たことは、私
自身の教育活
動の糧ともな
りました。そ
の後も弘前大
学が獲得した
文部科学省特
別教育研究経
費（二〇〇八
年度～二〇一
二年度）「テ
イチンング・ポ
ートフォリオ
を活用したFD
活動の展開」
の事業にも従
事し、二〇一
二年三月には
弘前大学出版
会から事業と
同名の単行本
を出版するこ
とに至ったこ
とは、大きな
成果であった
と実感してお
ります。

嬉しかった出来事のうち
二点を紹介させていただきます。
一点目は、二〇一〇
年三月に「教育に関して優
れた業績を上げた教員」と
して表彰されました。全学
での教育活動も評価され、
この表彰制度の第一回目に
表彰されましたことは誠に
光栄でした（医学部ウォー
カー第五十二号）。二点目
は、医学教育分野別評価（国
際基準）受審・認定への貢
献が評価され、二〇二二年
五月に「弘前大学表彰」と
して表彰されました。い
ずれも、教職員の皆さんとの
共同作業の賜物と感謝して
おります。

末筆となりましたが、弘
前大学のさらなる発展をご
祈念申し上げます。二十年
間、本当にお世話になりま
した。心よりお礼を申し上げ
ます。

第69回日本病理学会秋季特別総会

日本病理学会学術研究賞を受賞して

分子病態病理学講座 教授 水上浩哉

令和五年度日本病理学会学術研究賞を受賞しましたのでご報告いたします。日本病理学会学術研究賞は毎年四、八人程度、一連のストーリーがある研究成果に對し与えられる賞です。研究タイトルは糖尿病の成因および合併症病態の病理学的解析です。この賞は教授になる前の二〇一三年に一度応募したのですが、あえなく落選しました。その理由は単純で、質の良い論文数が少なかったことと、その後、捲土重来を期し、論文を書き上げました。教授になってからの八年間の研究業績を中心に再応募いたしましたところ、今回は何とか選考していただきました。私の研究は糖尿病を病理学的に研究するということを行っており、糖尿病はインスリンとホルモンの失調が基盤にあるため生理的、生化学的、分子生物学的な研究が中心です。そこをあえて病理学的に検索するということを前任の八木橋操六教授が始め、私が引き続いて行っており、私から糖尿病性神経障害についてマクロファージの関与について、2型糖尿病におけるβ細胞容積の減少については、膵島病理学的所見からの2型糖尿病の再分類を、そして糖尿病と癌の関係について新たに研究を



始めております。また、糖尿病性神経障害については、若木健康増進プロジェクトに参加させていただき、痛覚閾値とビッグデータの相関を検討しております。今回の受賞には糖尿病と癌の業績は含まれておりません。病理学会なので、糖尿病と癌も含むべきなのですが、残念ながらまだ高いインパクトファクターの業績がないことから、今回の選考には加えませんでした。選考は添付論文五本と二十本の論文を業績として記載します。五本の論文は直近十年で高いIFをもつ論文を添付しました。これら論文の筆頭者には臨床から派遣していただき、我々の教室で研究を行った大学院生が含まれております。私の無茶な要求にも答えてくれた大学院生達に大変感謝しております。現在、大学院生達、スタッフの先生たちは臨床、診断が忙しく、研究時間を長時間とることはかなり難しいよ

うです。そのため、研究を補佐する実験助手の力が非常に重要となってきます。我々の教室には小笠原実験助手と長内実験助手が二人おります。多くの実験を手伝ってらっており、本当に感謝しております。このように、今回の受賞は、分

子病態病理学講座の総合力で勝ち得た賞だと思えます。これからも効率的に研究を進め、基礎講座であるので、dryな研究と合わせてwetな研究を中心にしてさらに世界に発信できるように精進してゆく所存です。

この度、令和五年十二月八日、九日に東邦大学医療センター大森病院で開催された第十四回日本安定同位体・生体ガス医学応用学会大会にて若手優秀発表賞を受賞いたしましたのでご報告いたします。「臍全摘術後患者の安静時エネルギー代謝と栄養状態に関する検討」という題で、当院で臍全摘術が施行された症例を調査し、安静時エネルギー代謝と栄養状態の関連について発表をいたしました。臍切除後症例は臍外分泌機能不全が合併するが生じやすく、その上で臍内分泌機能不全が合併することで、急激な血糖変動を起し血糖マネジメントに難渋する例が少なくありません。臍切除後の主な治療戦略としては、適切なエネルギー設定をおこなうこと、十分な消化酵素補充療法をすること、強化インスリン療法を実施することの三点が重要であります。適切な必要エネルギー量の設定においては、BEE(基礎エネルギー代謝)×ストレス係数×活動係数で、総エネルギー量(TEE)で求めることができますが、

感染症の有無や術後合併症、食事の摂取量といった全身状態や、インスリン投与量や消化酵素補充量、それにともなう栄養状態などによってエネルギー代謝が変動してしまうため、ストレス係数をどの値に設定すべきかという問題が生じます。今回私達は六ヶ月以上経過した臍全摘術後十症例の安静時エネルギー代謝を間接熱量計を用いて実測し、食事摂取状況、栄養状態、血糖との関連について評価、検討をいたしました。その結果、四症例で代謝亢進を認め、代謝亢進群は有意に年齢が高く、栄養指標マーカーが有意に低い傾向にありました。一方でほとんどの症例で必要エネルギーを充足することができ

ていました。タンパク質の同化が進み、低栄養の状態から改善しつつある期間ではエネルギー代謝が亢進するとされており、本症例の代謝亢進群に関するものと思われ、間接熱量計による安静時エネルギー代謝の測定は、より適切な目標エネルギー摂取量を設定やQOL、栄養状態の改善に有用でありました。臍切除後症例のエネルギー代謝に関しては、未だ報告が少ない現状があり今回の受賞を励みとして更なる調査を進め、皆様のお力になれるよう尽力して参ります。最後にありますが、今回の発表にあたりご指導いただきました柳町幸先生、中村光男先生、藤田征弘先生をはじめとした当講座の先生方、共同演者の先生方に心より御礼を申し上げます。

この度、国際変形性関節症学会(Osteoarthritis research society international (OARSI)) board member として選出いただきました。この場をお借りしてご指導、ご協力をいただきました先生方に感謝申し上げます。世界にその経緯につきご報告させていただきます。OARSIはその名の通り、変形性関節症に関する研究を行う国際的な組織です。私は大学院生時代から社会学講座の中路重之教授と整形外科学講座の石橋恭之教授にご指導いただきながら変形性膝関節症に関する疫学研究を行って参りました。その中の研究成果を世界に発信するため、OARSIの学会発表を目標に研鑽し、国内外での学

（次ページへ続く）

この度、令和五年十二月八日、九日に東邦大学医療センター大森病院で開催された第十四回日本安定同位体・生体ガス医学応用学会大会にて若手優秀発表賞を受賞いたしましたのでご報告いたします。「臍全摘術後患者の安静時エネルギー代謝と栄養状態に関する検討」という題で、当院で臍全摘術が施行された症例を調査し、安静時エネルギー代謝と栄養状態の関連について発表をいたしました。臍切除後症例は臍外分泌機能不全が合併するが生じやすく、その上で臍内分泌機能不全が合併することで、急激な血糖変動を起し血糖マネジメントに難渋する例が少なくありません。臍切除後の主な治療戦略としては、適切なエネルギー設定をおこなうこと、十分な消化酵素補充療法をすること、強化インスリン療法を実施することの三点が重要であります。適切な必要エネルギー量の設定においては、BEE(基礎エネルギー代謝)×ストレス係数×活動係数で、総エネルギー量(TEE)で求めることができますが、

感染症の有無や術後合併症、食事の摂取量といった全身状態や、インスリン投与量や消化酵素補充量、それにともなう栄養状態などによってエネルギー代謝が変動してしまうため、ストレス係数をどの値に設定すべきかという問題が生じます。今回私達は六ヶ月以上経過した臍全摘術後十症例の安静時エネルギー代謝を間接熱量計を用いて実測し、食事摂取状況、栄養状態、血糖との関連について評価、検討をいたしました。その結果、四症例で代謝亢進を認め、代謝亢進群は有意に年齢が高く、栄養指標マーカーが有意に低い傾向にありました。一方でほとんどの症例で必要エネルギーを充足することができ

ていました。タンパク質の同化が進み、低栄養の状態から改善しつつある期間ではエネルギー代謝が亢進するとされており、本症例の代謝亢進群に関するものと思われ、間接熱量計による安静時エネルギー代謝の測定は、より適切な目標エネルギー摂取量を設定やQOL、栄養状態の改善に有用でありました。臍切除後症例のエネルギー代謝に関しては、未だ報告が少ない現状があり今回の受賞を励みとして更なる調査を進め、皆様のお力になれるよう尽力して参ります。最後にありますが、今回の発表にあたりご指導いただきました柳町幸先生、中村光男先生、藤田征弘先生をはじめとした当講座の先生方、共同演者の先生方に心より御礼を申し上げます。

この度、二〇二三年九月八日・九日に京都府で開催された第三十四回日本末梢神経学会学術集会において症例報告賞を受賞致しましたので、ご報告申し上げます。また医学部ウォーカーへの投稿は医学生時代からの密かな憧れでしたので、記念すべき初投稿ということで非常に感慨深い気持ちがございます。発表演題は「ペムブロリズマブにより多発根神経炎を呈した一剖検例」です。近年免疫チェックポイント阻害薬の使用が増加してきており、それに伴う免疫関連有害事象(immune-related adverse event: irAE)の報告もそれに追従する形で多くなってきています。irAEという下痢や肝障害などの消化器系障害や耐糖能異常や甲状腺機能障害などの

れ、間接熱量計による安静時エネルギー代謝の測定は、より適切な目標エネルギー摂取量を設定やQOL、栄養状態の改善に有用でありました。臍切除後症例のエネルギー代謝に関しては、未だ報告が少ない現状があり今回の受賞を励みとして更なる調査を進め、皆様のお力になれるよう尽力して参ります。最後にありますが、今回の発表にあたりご指導いただきました柳町幸先生、中村光男先生、藤田征弘先生をはじめとした当講座の先生方、共同演者の先生方に心より御礼を申し上げます。

この度、国際変形性関節症学会(Osteoarthritis research society international (OARSI)) board member として選出いただきました。この場をお借りしてご指導、ご協力をいただきました先生方に感謝申し上げます。世界にその経緯につきご報告させていただきます。OARSIはその名の通り、変形性関節症に関する研究を行う国際的な組織です。私は大学院生時代から社会学講座の中路重之教授と整形外科学講座の石橋恭之教授にご指導いただきながら変形性膝関節症に関する疫学研究を行って参りました。その中の研究成果を世界に発信するため、OARSIの学会発表を目標に研鑽し、国内外での学

この度、国際変形性関節症学会(Osteoarthritis research society international (OARSI)) board member として選出いただきました。この場をお借りしてご指導、ご協力をいただきました先生方に感謝申し上げます。世界にその経緯につきご報告させていただきます。OARSIはその名の通り、変形性関節症に関する研究を行う国際的な組織です。私は大学院生時代から社会学講座の中路重之教授と整形外科学講座の石橋恭之教授にご指導いただきながら変形性膝関節症に関する疫学研究を行って参りました。その中の研究成果を世界に発信するため、OARSIの学会発表を目標に研鑽し、国内外での学

（次ページへ続く）

若手優秀発表賞受賞

大学院三年 小野寺航

第14回日本安定同位体・生体ガス医学応用学会大会

第34回日本末梢神経学会学術集会

大学院一年 清野翔太

第34回日本末梢神経学会

末梢神経を顕微鏡する

この度、二〇二三年九月八日・九日に京都府で開催された第三十四回日本末梢神経学会学術集会において症例報告賞を受賞致しましたので、ご報告申し上げます。また医学部ウォーカーへの投稿は医学生時代からの密かな憧れでしたので、記念すべき初投稿ということで非常に感慨深い気持ちがございます。発表演題は「ペムブロリズマブにより多発根神経炎を呈した一剖検例」です。近年免疫チェックポイント阻害薬の使用が増加してきており、それに伴う免疫関連有害事象(immune-related adverse event: irAE)の報告もそれに追従する形で多くなってきています。irAEという下痢や肝障害などの消化器系障害や耐糖能異常や甲状腺機能障害などの

れ、間接熱量計による安静時エネルギー代謝の測定は、より適切な目標エネルギー摂取量を設定やQOL、栄養状態の改善に有用でありました。臍切除後症例のエネルギー代謝に関しては、未だ報告が少ない現状があり今回の受賞を励みとして更なる調査を進め、皆様のお力になれるよう尽力して参ります。最後にありますが、今回の発表にあたりご指導いただきました柳町幸先生、中村光男先生、藤田征弘先生をはじめとした当講座の先生方、共同演者の先生方に心より御礼を申し上げます。

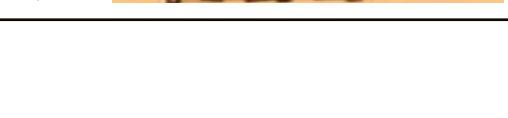
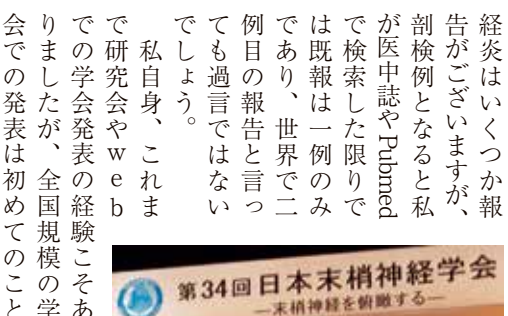
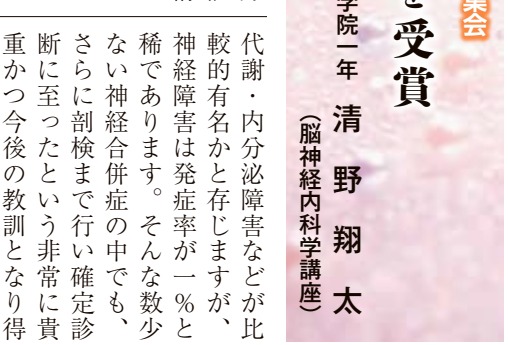
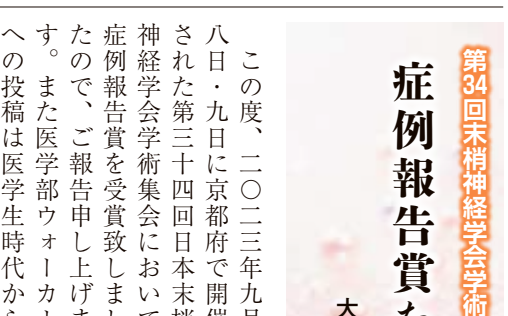
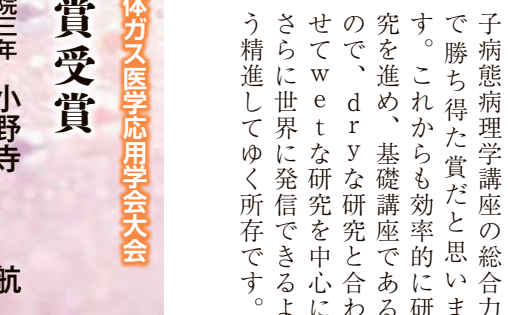
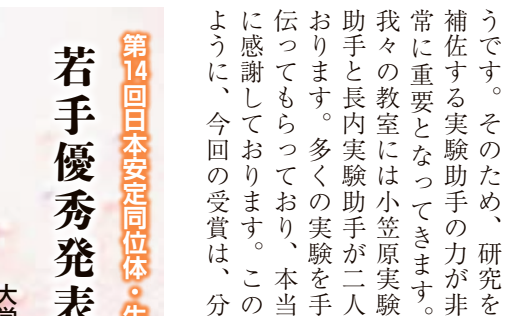
この度、国際変形性関節症学会(Osteoarthritis research society international (OARSI)) board member として選出いただきました。この場をお借りしてご指導、ご協力をいただきました先生方に感謝申し上げます。世界にその経緯につきご報告させていただきます。OARSIはその名の通り、変形性関節症に関する研究を行う国際的な組織です。私は大学院生時代から社会学講座の中路重之教授と整形外科学講座の石橋恭之教授にご指導いただきながら変形性膝関節症に関する疫学研究を行って参りました。その中の研究成果を世界に発信するため、OARSIの学会発表を目標に研鑽し、国内外での学

この度、国際変形性関節症学会(Osteoarthritis research society international (OARSI)) board member として選出いただきました。この場をお借りしてご指導、ご協力をいただきました先生方に感謝申し上げます。世界にその経緯につきご報告させていただきます。OARSIはその名の通り、変形性関節症に関する研究を行う国際的な組織です。私は大学院生時代から社会学講座の中路重之教授と整形外科学講座の石橋恭之教授にご指導いただきながら変形性膝関節症に関する疫学研究を行って参りました。その中の研究成果を世界に発信するため、OARSIの学会発表を目標に研鑽し、国内外での学

この度、国際変形性関節症学会(Osteoarthritis research society international (OARSI)) board member として選出いただきました。この場をお借りしてご指導、ご協力をいただきました先生方に感謝申し上げます。世界にその経緯につきご報告させていただきます。OARSIはその名の通り、変形性関節症に関する研究を行う国際的な組織です。私は大学院生時代から社会学講座の中路重之教授と整形外科学講座の石橋恭之教授にご指導いただきながら変形性膝関節症に関する疫学研究を行って参りました。その中の研究成果を世界に発信するため、OARSIの学会発表を目標に研鑽し、国内外での学

この度、国際変形性関節症学会(Osteoarthritis research society international (OARSI)) board member として選出いただきました。この場をお借りしてご指導、ご協力をいただきました先生方に感謝申し上げます。世界にその経緯につきご報告させていただきます。OARSIはその名の通り、変形性関節症に関する研究を行う国際的な組織です。私は大学院生時代から社会学講座の中路重之教授と整形外科学講座の石橋恭之教授にご指導いただきながら変形性膝関節症に関する疫学研究を行って参りました。その中の研究成果を世界に発信するため、OARSIの学会発表を目標に研鑽し、国内外での学

（次ページへ続く）



(前ページより)
会発表を重ねるうちに、以前OARSI board memberだった順天堂大学整形外科の石島旨章教授にお声がけいただいたのが、今回の挑戦のきっかけとなります。石島先生とは研究分野が近いこともあり、学会ではいつも情報交換やコメントをいただき、研究発展の大事な議論をさせていただいておりました。今、国際会議で話し合われている最新のトピックについて教えていただけたのは私にとって大変刺激的でした。

私が今回board memberに選出いただいた背景として、変形性膝関節症の中でも早期変形性膝関節症という新たな概念に注目して疫学研究を行ってきたことが評価されたのだと考えております。変形性膝関節症は、これまで加齢による軟骨の摩耗が生じ、関節が大きく変形してしまつたら人工関節置換術を行うもの、と認識されていたように思いますが、しかしながら、関節の構造的な変化(変形)が始まる前の段階でも変形性膝関節症が進行しやすい原因を積極的に探索することで、予防的な介入や治療が可能な病態が隠れていることがわかってきました。これは健康対象者を多く含む若木健康増進プロジェクトを対象に研究できたからこそこの成果と考えることができると考えております。ADへの進行を遅らせるためには早期診断と介入が重要であるため、近年の画像研究ではMRIの同定に焦点が当てられています。MRIの適切な構造変化を調べるためにMRIを用いた様々な形態解析が行われていますが、MRIなどの初期段階では

も注目されており、専門家による研究プロジェクトも組織されており。今回そのプロジェクトメンバーに参加したく申請を行いました。新たな疾患概念とそれに対する治療戦略を作成していくことは大きなチャレンジではあります。膝の健康を守り、フレイルやロコモティブシンドロームを予防したいという思いで研究してきましたので、こ

の機会を活かして研究活動を邁進させたいと考えております。最後になりますが、この場をお借りしてご指導ご協力いただきました弘前大学整形外科講座石橋恭之教授、順天堂大学整形外科講座石島旨章教授、中野重之先生をはじめとする若木健康増進プロジェクト関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

論文が European Radiology (IF=7.034) に Accept されました

大学院二年 梅村 芳史 (放射線診断学講座)

この度、二〇二三年十一月に European Radiology において論文が Accept されましたので報告いたします。European Radiology とは欧州放射線学会の公式学会雑誌であり、そのような学会に論文が Accept されたことは大変な光栄と感じています。

論文のタイトルは「Choroid plexus enlargement in mild cognitive impairment on MRI」です。軽度認知障害(MCI)における脈絡叢容積(CPV)の変化について研究しました。MCIとは認知機能低下を特徴とする症候群であり、一般的にアルツハイマー病(AD)の前駆症状と考えられています。ADへの進行を遅らせるためには早期診断と介入が重要であるため、近年の画像研究ではMCIの同定に焦点が当てられています。MCIの適切な構造変化を調べるためにMRIを用いた様々な形態解析が行われていますが、MRIなどの初期段階では

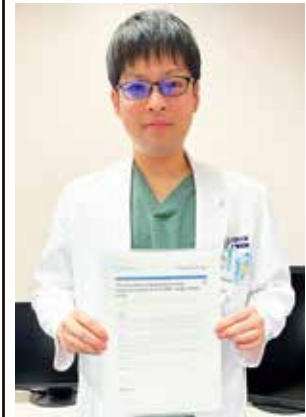
正確な診断は困難です。最近の研究では、認知機能障害がある患者ではCPVが増大していることが報告されました。しかし、MCIの段階におけるCPVについては詳細な研究はされていません。そこで我々は、CPVがMCIにおける独立した予測因子であるかどうかについて検討しました。今回の研究では、いきいき健診に参加された二千三百九十人を対象としました。概要は、参加者をMCI群と健康者群に二群化し、この二群間に独立して関連している因子について、各脳容積を含めたロジスティック回帰分析をしました。結果は、CPVは年齢や性別などの交絡因子から独立してあり、さらに脳実質容積や海馬容積に対して有意に独立していることがわかりました。また、両群でCPVは側脳室容積(LVV)との相関性が高いこと

令和5年度 公的化共用試験(CBT・OSCE)を終えて

医学教育学講座 教授 鬼島 宏

公的化されて初めての実施となる二〇二三年度・共用試験(CBT・OSCE)は、CBT本試験が九月、OSCE本試験が十二月に実施され、各々一回の再試験も含めて無事に終了しました。

もわかりました。今回の結果は前述で述べた先行研究と一致し、CPVとLVVの変化がMCIの段階ですでに存在することが示唆されます。多くの先行研究でもADにおける脈絡叢の機能不全を示唆しており、我々の結果に一致しています。今回の研究により、CPVが認知障害の疾患進行を定量化する画像マーカーになるかもしれません。本研究では、弘前大学COI研究推進機構の中路重之先生をはじめとした、いきいき健診プロジェクトの方々にご支援いただきました。また本研究は放射線診断学講座の掛田伸吾教授、脳神経内科学講座の富山誠彦教授、京都大学オープンイノベーション機構の渡邊啓太先生にご指導いただきました。この場をお借りして感謝申し上げます。



プレ・クリニカルクラークシップ (基本的臨床手技)

卒前・卒後のシームレスな医師養成に向け、臨床実習における医学生の医行為が法的に位置づけられ、OSCE) に関するもの公的化がなされました。公的化後の共用試験では、診療参加型臨床実習に参加する医学生の知識及び技能を保証するとともに、受験者間の公平性を確保する観点から、全大学の受験者に共通して適用される統一合格基準(試験実施主体は医療系大学間共用試験実施評価機構)が設定されることになりました。

弘前大学のOSCEは、過去三年間(二〇二〇、二〇二二)の新型コロナウイルス感染症情勢に鑑み特例実施が行われてきました。具体的には、課題数を抑え(六課題)、評価者を最小限にとどめ(各ステーション原則一名)、模擬患者ではなくシミュレーターで対応するなどの対策をとってきました。一方、今年度は、公的化の下での厳正なOSCEの実施が求められました。各ステーションで二名ずつの認定評価者(機構の評価者認定講習会の受講必須)を配置することに伴い、年度初めに八課題(医療面接・バイタルサイン・頭頸

部・胸部・腹部・神経・基本的臨床手技・救急)に対し十分な数の認定評価者の育成から始まりました。医療面接の模擬患者さんの育成も必要となりました。過去三年間途絶えていた模擬患者活動を再開するとともに、新規の模擬患者さんにも加わっていただきました。OSCE前のトレーニングに相当するプレ・クリニカルクラークシップは、従来は三週間であったのを、四週間に延長することによって、学生の皆さんにとっても十分な準備期間となりました。

公的化共用試験「元年」を経験して感じたことは、正直申し上げて試験実施はかなりの負担です。特に、課題数のさらなる増加予定のOSCE実施は、弘前大学のみならず、多くの地方大学では「相当な負担」となります。

臨床実習前OSCE 2023年度の概要

| | 2022年度 | 2023年度 |
|------------------|-----------------------|---------------|
| 到達基準 | 大学独自 | 全国統一 |
| 受験者の異議申し立て | (準備期間) | 運用開始 |
| 受験機会 | 本試験1回、追加試験1回 | 変更なし |
| 模擬患者追加試験 | 年5回 | 年6回 |
| 合理的配慮支援 | 運用開始 | 変更なし |
| 実施課題数 | 8~10課題 | 変更なし |
| 評価者 | 認定評価者でなくとも担当可能 | 認定評価者が優先 |
| 外部評価者 | 1課題領域当たり2名以上の派遣 | 変更なし |
| 医療面接模擬患者 | 認定模擬患者でなくとも担当可能 | 認定標準模擬患者が原則担当 |
| 自大学養成模擬患者 | 担当可能 | 変更なし |
| 身体診察模擬患者(医学生) | 原則として担当不可 但し、2年生は可 | 変更なし |
| 不正行為への対応 | (準備期間) | 運用開始 |
| 特例実施(COVID-19対応) | 継続 | 廃止:柔軟な運用に変更 |
| OSCEに関する動画 | HPまたはDVD | 動画配信 |

写真コラム(23) 昭和時代の部室

血管・炎症医学講座 教授 今泉 忠 淳



【写真1】2023年。

弘前大学医学部では、現在も部活動が盛んですが、私が在学していた昭和の終わりの頃も、活発に部活動が行われていました。私は卓球部と写真部に所属していました。現在は、医学部コミュニケーションセンター【写真1】がある場所に、木造の部室小屋【写真2】があり、いくつかの部が入居していました。写真部のモノクロ銀塩写真を現像・焼き付けするための暗室もこの建物の中にありました。この写真の左側に移っている紐には、野球部が洗濯したユニフォームを干していました。この部室はバラック同様で、夕方、野球部が練習を終えてどかどかと戻ってくると、建物全体が揺れました。したがって、写真部が写真の焼き付けを行うのは、必然的に野球部が入り込まない夜~深夜になることが多かったのです。暗室作業は、ラジオを聴きながら行ったものですが、「小沢正一の小沢正一のこと」(1973年~2012年に放送)が



【写真2】1988年。

記憶に残っています。暗室作業に疲れて焼鳥屋「たかやん」へ行くと、よく写真部の先輩が「サントリー ホワイト(サン白)」を飲んでいて、おごっていたのものでした。

「多職種連携とDX技術で融合した 北東北が創出する地域医療教育コ モンズ」事業シンポジウム

地域基盤型医療人材育成センター
副センター長 鬼島 宏
(医学教育学講座 教授)

弘前大学は、文部科学省が公募した大学教育再生戦略推進費「ポストコロナ時代の医療人材養成拠点形成事業」(令和四年度から七年度)で全国十一拠点のうちの一つに選定されています。本学の拠点形成事業は「多職種連携とDX技術で融合した北東北が創出する地域医療教育コモンズ」であり、秋田大学・弘前学院大学・弘前医療福祉大学、青森県と連携しながら、多職種連携教育を基盤とした総合的に患者・地域住民を診る資質・能力を持つ医療者教育により持続可能な地域医療共同体を北東北に構築することを目的としています。

医学教育であることの必要性が説明され、その目標達成の中心である医学部・附属病院に求められるものに関しての具体的な取り組みが紹介されました。シンポジウム後半は、「多職種連携と屋根瓦」をテーマとしたパネルディスカッションが行われました。パネリストには、医学教育学講座・野村理助教



卒業教育をつなぐ Learning Society の形成」と題した特別講演がありました。特別講演では、地域完結型医療を意識した



秋田大学先進デジタル医学・医療教育学講座・及川沙耶佳特任教授の他に、医学科六年次・秋田優里菜さん、保健学科四年次・八幡恭輔さんが加わり、有意義な討論が行われました。最後に、廣田和美医学研究科長より挨拶があり、盛会裡にシンポジウムが終了しました。

参加者は、大学等の教育機関教職員に加えて、大学生・大学院生、自治体等行政職員、一般の方と多岐にわたりました。シンポジウム後のアンケートでも、事業への理解が深まる良い内容であった、パネリストに学部学生が加わっていたのが良かったなどの意見をいただきました。

「多職種連携とDX技術で融合した北東北が創出する地域医療教育コモンズ」は令和十年度まで継続して事業を展開してゆきます。青森県・秋田県を中心とした地域医療教育がさらに充

青森県知事との懇談会 五年次学生との懇談会

学務委員長 鬼島 宏
(医学教育学講座 教授)



宮下宗一郎・青森県知事と五年次学生との懇談会が、令和六年一月十六日に医学部基礎大講堂にて開催されました。県側からは宮下知事に加え、永田翔健

康福祉部長・小川克弘良医育成支援特別顧問らが出席し、福田学長、廣田医学部長、袴田附属病院長の列席

公益社団法人 青森医学振興会

【沿革】平成11年3月1日 弘前大学医学部医学科後援会鵬桜医学振興会発足(任意団体)
平成13年4月2日 社団法人青森医学振興会設立認可
平成24年4月1日 公益社団法人青森医学振興会へ移行認定

- 当会では、青森県の医学・医療の発展を促進するため、次の事業活動を行っております。
- 医学教育活動の活性化を図るための事業への支援
 - 医学・医療の高度化に資する医学研究事業への支援
 - 地域医療の振興に寄与する事業への支援
 - 海外との学術交流等の活性化を図るための事業への支援

随時、会員の募集とご寄附を受付しております。本会の公益目的事業に対する寄附金(年会費を含む)は、確定申告をしていただくことにより税制上の優遇措置の対象となります。年会費は、下記いずれかの口座へお振込み願います。なお、ご入会をご希望される方又はご寄附(年会費を除く)をされる方は、お手数ですが当会までご連絡をお願いいたします。ゆうちょ銀行については、専用の払込用紙を用意しております。

| | | | |
|-----|----------------|----------------------|----------------------------|
| 口座名 | 公益社団法人 青森医学振興会 | | |
| 口座 | 青森銀行 親方町支店 | 普通 1087485 | (お願い:振込手数料はご負担願います。) |
| | みちのく銀行 大学病院前支店 | 普通 0198579 | (お願い:振込手数料はご負担願います。) |
| 会費 | ゆうちょ銀行 | 口座記号番号 02200-4-57580 | (専用の払込取扱票を利用の場合は、振込手数料は無料) |
| | 会員種別 | 年会費 | |
| | 医学部教員 | 1万円 | |
| | 医学部卒業生等 | 2万円 | |
| | 賛同する個人 | 2万円 | |
| | 賛同する団体 | 10万円 | |

お問い合わせ 公益社団法人青森医学振興会事務局
TEL・FAX 0172-40-2872 E-mail: info@aomori-mpm.jp

第161回弘前医学会例会 学会賞に吉澤忠司先生

弘前医学会会計幹事 黒瀬 顕
(病理診断学講座 教授)

大寒を過ぎ雪は少ないながら冷え込んだ一月二十六日午後、百六十一回弘前医学会例会が医学部コミュニティセッションセンターで開催されました。弘前医学会会長廣田和美先生のご挨拶の後、一般演題に移りました。今年度は令和二年度、第三十九回唐牛記念医学研究基金助成金と令和三年度、第四回櫻井記念医学研究賞を授与された五演題も含め、例年より多い十三題が発表されました。いずれも皆さん日頃の研究内容や成果をご披露されたもので、お互いを切磋琢磨するよい機会となりました。

次いで選考委員、佐藤温先生、津田英一先生、平林健先生、島田美智子先生、齋藤紀先生による優秀発表賞選考が行われ、委員長平林先生より吉澤忠司先生(病理生命科学講座)の「Tissue clearing法を用いた胆道・膵臓癌の3次元画像解析」が優秀発表賞に選ばれました。この賞は、県内の大小医療機関を循環する本県オリジナルの地域循環型医師育成システムに関する試みがなされ、県と大学との連携も強化されつつあります。青森県の医療の未来に明るい展望を持つためには、弘前大学医学部を中心とする循環型医師育成の中で、多くの卒業生が青森県に定着し、大学が担う教育・研究機能を充実してゆくことも肝要です。



実・発展するよう、医学研究科附属地域基盤型人材育成センターのスタッフが丸となった尽力してゆく次第です。今後ともどうぞ宜しくお願い申し上げます。

医学科学生との定期的な懇談は、全国的に見ても極めて稀有な会となっており、春は新入生を対象に、秋は五年生を対象としたものです。この懇談会がスタートしたのは平成十七年のことであり、十九年にわたる連続で開催されています。宮下知事となつてからは、最初の記念すべき懇談会となりました。

懇談会の初めに宮下知事からは「青森県の目指す医療の姿」と題した講演がありました。むつ市長時代の下北地域の医療行政の中で、慢性的な医師不足への対応や、新型コロナウイルス感染症への種々の対策などを示されました。それを基盤に知事となった現在、青森県の医療の未来に明るい展望を持つために何をすべきかの説明がなされました。

知事の講演の後は、学生との活発な意見交換が行われました。学生からは、む

つ総合病院での実習では医師の専門性のみならず患者を総合的にみることの大切さ、男女共同参画の促進による医療者の労働環境の向上、スポーツ医学など若年者への医療、全国的にみても深刻な青森県の医師不足への対応などに関する意見が出され、和やかな雰囲気の中にも熱心な懇談がなされました。

現在、青森県や自治体からの寄附講座が複数設置さ

ばれた旨が発表されました。選考理由としては、蛍光での三次元画像により癌の進展を視覚的に訴えた点が印象的であったと述べられました。

その後の例会講座は病態薬理学講座准教授に着任された丹羽康貴先生にお願いし「眠気」と題する講演を指しして」と題する講演を拝聴しました。覚醒時の活動の記憶が眠気に関係するというとても面白い内容であり、同じ学内に所属しながら全く異なったテーマの研究が行われている事を改めて知り、大いに刺激されました。

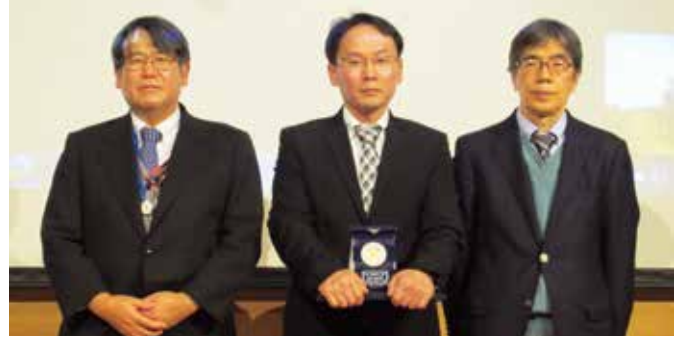
次いで、上野伸哉先生の座長による第二十八回弘前大学医学部学術賞受賞記念講演に移りました。学術奨励賞受賞記念講演は遅野井祥先生(内分泌代謝内科、分子病態病理学講座)と木下裕貴先生(集中治療部)に、学術特別賞は齋藤淳一先生(麻酔科)と諸橋一先生(消化器乳腺甲状腺外科)にご講演いただきました。遅野井先生は留学先のシンシナチからのweb講演であり時差と空間を超えお話しされました。

参加総数は八十九人でこのうちTeamsによる参加は二十二人でした。演題も多く充実した例会となりました。次回は本年七月六日(出)、第七回弘前医学会総会が八戸市にて開催されます。皆様是非ご参加下さい。

弘前医学会優秀発表賞を受賞して

病理生命科学講座 准教授 吉澤忠司

この度は、令和六年一月二十六日に開催されました第百六十一回弘前医学会例会において、優秀発表賞を頂くことができました。選考委員の先生方、また日頃より共同研究をさせていただいている消化器外科科学講座の先生方、大学院生に感謝いたします。今回発表した演題は「Tissue clearing法を用いた胆道・膵臓癌の3次元画像解析」です。Tissue clearing法とは、有機溶媒を用いた組織を透明化後、画像取得、画像解析ソフト (IMARIS) を用いて3次元構築・解析する手法です。本手法により、実際の人体組織内で起こっている現象を2次元画像からの想像ではなく、目に見える形で、3次元画像として得られるという大きなメリットがあります。本研究では、癌と神経の関係性を、切除標本 (胆管癌組織) を用い、3次元構造解析を行いました。近年、癌と神経との関係は、注目されている分野であり、特に膵癌、胆管癌組織では、神経周囲に癌組織が浸潤する像が、他の消化器癌よりも多く観察されます。しかし、その癌と神経の3次元構造を明らかにした報告はありませんでした。本研究により、癌の発生とともに、神経新生が起こり、その新生神経を伝って癌細胞



受賞者を囲んで (平林選考委員長 吉澤忠司先生 上野伸哉会長代行)

が連続的に神経周囲を伝い、胆管壁を広く範囲に進展していく像を明らかにすることが出来ました。つまり癌の進展と神経新生は密接に関係しており、ここに働く因子を明らかにすることが、今後治療ターゲットの発見に結びつくのではないかと考えております。現在、そのターゲットを明らかにするべく、消化器外科科学講座の大学院生とともに、神経周囲に浸潤する癌細胞に特異的に発現する遺伝子を空間トランスクリプトーム解析により解析し始めたところです。最後に、本研究は、櫻井様 (第四回櫻井記念医研究賞若手奨励賞) からの援助をもとに行う事が出来ました。この場をかりて厚く御礼申し上げます。

Global Gold September Campaign 2023 「弘前城ゴールドライトアップ」開催

小児科学講座 助教 小林明恵



附属病院正面玄関での啓発ポスターとツリーの展示

毎年九月に小児がんの子どもたちへの支援を表明し、小児がんの啓発を目的として「ゴールド・セブテンパー・キャンペーン」が世界中で開催されています。世界各地の名所やシンボルで小児がんの啓発リボンカラーである「ゴールド」カラーのライトアップやゴールドリボンを掲げるなどのイベントが行われます。当科も参加する日本小児がん研究グループ (JCCG) を中心に日本でも二〇二一年から各地の名所がライトアップされ、二〇二三年は北海道から沖縄まで六十九か所が金色に輝きました。ここ弘前でも地域の方々から小児がんについて想いを寄せて頂ければ、と弘前市や附属病院、患者家族会「ういず」、患者支援団体「ともしびプラス」のご協力を受け、二〇二二年から弘前城ゴールドライトアップを行っています。



メッセージでいっぱいになったゴールドリボンツリー



金色に輝く弘前城の前で患者さん、ご家族、スタッフと共に記念撮影。

今年度も九月二十三日(土)にゴールドライトアップイベントを開催しました。当日はお昼過ぎから患者さんご家族の交流会「おはなしの会」を開催し、入院中のことや治療後の保育園や学校などに纏わる経験や悩みを共有する時間を過ごしました。その後、夕暮れと共に弘前公園へ移動し、集まった患者さんやご家族、当科や病棟のスタッフ、保健学科教員で金色の弘前城を写真に収めたり、久しぶりの再会にお話が弾んだりといった楽しい時間となりました。今回は袴田病院長のご提案で追手門から本丸のライトアップ会場までを小児科病棟のプレイルームにオンライン中継し、入院中のお子さん達やご家族にもイベントの様子を味わって頂くことができました。また、九月のなか月間、キャンペーンに合わせ附属病院正面玄関に小児がん啓発のポスターとゴールドリボンツリーを展示しました。七夕の短冊のように

うにゴールドリボンのメッセージカードを設置したところ、来院された方々の手によってツリーいっぱい多くのメッセージをお寄せ頂きました。弘前城ライトアップとツリーの様子はJCCG広報紙にも取り上げられましたので、ぜひJCCGホームページからご覧ください。小児がんは希少疾患であり身近な事として捉えられ難いため、認知度が低いこと、難治疾患や有効な治療法のない疾患があること、成長発達途中の子どもたちが強力な治療を受けることによる晩期障害の問題や学校の問題、治療後の生活の問題：と多くの課題があります。キャンペーンをきっかけに皆さんに小児がんについて知って頂き、支援の輪が広がっていくことを願っています。

「休みの時間の感染症学」

齋藤 紀先

(臨床検査医学講座 准教授)

「休みの時間の〇〇学」シリーズではすでに「休みの時間の免疫学 (第三版)」を執筆しており、多くの学生さんに利用して頂き大変ありがたく思っております。今回、その「感染症学」版が完成し発行することができました。新型コロナウイルスの流行の中、一般の方々やメディア、あるいは医療関係者が発信する情報ですら「さすがにそれは違うんじゃないか」という感染症の情報が氾濫していることを感じてきました。また、学生の感染症学に対する弱さも実感しました。そこで今回、新型コロナウイルスも落ち着いた(?)ところで、感染症の本当に基本的な知識をまとめ、入門書として情報発信することにしました。本書は医学生や研修医、あるいは感染症診療の簡単なまとめ知識が欲しいドクター向けに執筆しました。感染症学の最低限の知識がまとまっていると思えます。

【内容】

- Chapter 1 感染症を理解するための正しい検査結果の考え方
- Chapter 2 ウイルス感染の検査
- Chapter 3 感染症の診断

「臨床麻酔薬理学書」

廣田 和美 (麻酔科学講座 教授)

日本麻酔科医会連合会により「臨床麻酔科学の成書をつくる」という目的のもと編集されたシリーズ第二弾の本です。一冊目の「臨床麻酔科学書」の薬理学の内容を補完する書籍として企画されました。麻酔関連薬剤の薬理学を基礎からしっかり理解することが出来ます。全麻酔科医にとって必読の成書です。



日本麻酔科医会連合会出版部、編集主幹：森田潔 (岡山大学名誉教授 / 川崎医科大学特任教授) / 編集：廣田和美 (弘前大学) / 川真田樹人 (信州大学)



- Chapter 3 練習問題・解答
 - Chapter 4 細菌の分類と抗菌薬
 - Chapter 5 真菌と抗真菌薬
 - Chapter 6 感染症 (抗菌薬) 治療のプロセス
 - Chapter 7 薬剤耐性菌と耐性化の機序
 - Chapter 8 感染症各論 I : 一般感染症
 - Chapter 9 感染症各論 II : 性感染症、食中毒
 - Chapter 10 感染症各論 III : ウイルス感染症とワクチン
 - Chapter 11 感染症各論 IV : その他の重要な感染症
 - Chapter 12 感染対策と法律
- 国家試験問題集 : 200問にチャレンジ!

仕様 : 二八八ページ / フルカラー A5 判
定価 (税込み) : 二,四二〇円
二〇二三年十月二十日発行
著者 : 齋藤紀先

書籍のおしらせ

特集

令和5年度 弘前大学学術賞

第28回 弘前大学医学部学術賞

第24回 弘前大学医学部医学科国際化教育奨励賞

第26回 弘前大学医学部附属病院診療奨励賞

第42回 唐牛記念医学研究基金

令和5年度 弘前大学学術賞

遠藤賞 弘前大学学術特別賞（遠藤賞） を受賞して

分子病態病理学講座 教授 水 上 浩 哉

令和5年度弘前大学学術特別賞（遠藤賞）を受賞された水 上 浩 哉 先生。報告いただきましたので、この賞に選考していただいた福田眞作学長、選考委員の先生方に厚く御礼申し上げます。受賞タイトルは「病理学的探究による糖尿病病態の解明」です。現在、糖尿病、その合併症に対して根治的治療法は確立されておらず、治療に結びつく機序の解明は喫緊の課題となっております。我々の講座では糖尿病のヒト組織、マウス、ラットモデルを用いて、その機序を病理学的に解明しております。2型糖尿病の病態に対してはそのβ細胞容積の低下機序を検討しております。我々の解析により、β細胞容積の低下には高血糖状態から惹起される酸化ストレスをはじめとする様々なストレスが関与すること、隣島アミロイドによりβ細胞容積が著しく低下すること、アミロイド沈着を促進する因子（加齢、大血管障害、肥満）により2型糖尿病はさらに細分類できる可能性を

弘前大学学術特別賞授与



明らかにしました。特に、老年発症の糖尿病では隣島アミロイド沈着とともに導管内腫瘍性病変を高率に伴っていることを見出し、その病態を初めて明らかにしたことは病理学の知識があつたからこそ成し得た成果だと思っております。一方で、合併症については糖尿病性神経障害を研究対象としております。糖尿病性神経障害は頻度が高く、糖尿病早期に発症します。足趾の痛み、異常感覚から、放置しておくと感じの脱失、切断となり、患者のQOLを著しく低下させます。私たちは岩木健康増進プロジェクトに参画し、痛覚閾値の測定による糖尿病性神

遠藤賞 弘前大学学術特別賞（遠藤賞） を受賞して

脳神経病理学講座 助教 三 木 康 生



このたび「多系統萎縮症における臨床病理学的多様性の解明」というテーマで弘前大学学術特別賞（遠藤賞）を受賞いたしました。尊敬する遠藤正彦先生の名を冠した歴史ある賞である。経路に関与する新しい因子の探索を行いました。その結果、炎症と痛覚閾値悪化の関連が見い出されました。そこで、モデル動物を用いて検討したところ、早期の神経障害では末梢神経に炎症性マクロファージの浸潤、それによる酸化ストレス、逆行性軸索輸送の障害が惹起されることを明らかにしました。特に、逆行性輸送の障害についてはプレシリリスも行うことができませんでした。これら研究は当講座に臨床科から派遣された多くの大学院生が中心となって行われた研究です。院生を派遣していただいている消化器外科科学講座、内分泌代謝内科学講座をはじめとした臨床科の先生方に大変感謝しております。これからも、この賞に恥じぬよう、研究を続けていきたいと思っております。どうもありがとうございます。

り、大変な励みになりました。選考に関わられた先生方に深くお礼申し上げます。多系統萎縮症（MSA）は自律神経障害、パーキンソン症状、小脳性運動失調を三徴とする神経変性疾患で、発症から六年程度で死亡する難病です。これまで治療が世界中で行われてきたものがありません。弘前大学学術特別賞（遠藤賞）を受賞いたしました。理由として、治療の際に用いられる旧MSA臨床診断基準の診断精度が充分でないことが以前より挙げられていました。つまり、1)旧診断基準を満たす患者は高度に進行したMSAである一方で、MSA類似疾患「パーキンソン病（PD）や進行性核上性麻痺（PSP）」などが治療に混入しうることで、2)旧診断基準を満たさない非典型的MSA患者もある一定数存在すること、3)診断を指示する、あるいは指示しない徴候の再検証が必要であること、です。2)の非典型的MSAは治療に反応しやすいことができ、治療に組み込む大きな意味があります。そこで私は、当時留学していた英国 University College London Queen Square Brain Bankに蓄積された多数のMSA剖検脳と臨床歴を用いてこれらの問題に取り掛かりました。

を明らかにしました。こういったMSA類似疾患を臨床診断する際、往々にしてPDやPSPらしい臨床症状に加えてMSAを示唆する紛らわしい臨床症状を併せ持ちます。その際、高度の自律神経障害とMSAの診断を支持する徴候の有無を吟味すると高い精度で類似疾患を除外できることを見出しました。次に、PDやPSPと臨床診断された非典型的MSA患者を抽出し、膨大な臨床症状から軽症でもMSAの臨床診断に至るアルゴリズムを作成しました。さらに、認知症の存在はMSAの診断を支持しないと旧診断基準で明記されていましたが、私たちはMSAに見られる認知機能障害の種類や頻度、記憶障害の成因を明らかにしました。記憶障害の成因における研究は本学で樹立したMSAモデルマウスを用いて行ったものです。そして、これらの貢献が認められ、二〇二二年に改定された新MSA臨床診断基準の改定委員として治療法開発の方向性を世界に示すことができました。

最後に、剖検に賛同してくださった若林孝一教授、若林さんやご家族、指導してくださった若林孝一教授、そしてQueen SquareのHeidi Ling先生、Janice Holton教授、Zhai Qiumin教授に改めてお礼申し上げます。以前臨床に関わっていた際、治療法はありませんと患者さんに伝え、介護の話に移るのをいつも心苦しく思っていました。MSAの患者さんに「治療法はありません」といつか伝えられるように頑張ります。この度は本当にありがとうございます。

若手優秀論文賞 弘前大学学術特別賞 （若手優秀論文賞）を受賞して

アクティブライフプロモーション学講座 客員研究員 木 下 佳 大

この度は、若手優秀論文賞を受賞させていただきました。私は、二〇二三年三月まで社会医学講座の大学院生として学ばせていただいたおかげで、ご指導いただいた先生方・関係者の皆様にご協力いただき、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

本論文は、弘前大学（OIC）の岩木健康増進プロジェクトの健康ビッグデータ解析によるもので、新型コロナウイルス感染症の流行前後の健診データを縦断的に解析することで、座位行動が増加し、それが内臓脂肪の蓄積など健康に悪影響を及ぼしていることを明らかにすることができました。当時、世間ではコロナ太り、運動不足などが話題になっておりましたが、しっかりと研究されたエビデンスはなく、質の高い肥満研究が報告されている国際誌 International Journal of Obesityに掲載されたことにより、多くの方に関心をもっていただくことができました。

本研究が実現したのは、コロナ禍においてもプロジェクティブ健診が毎年欠かさず実施されてきたことにより、コロナ禍での健診の実施は、開



催時期の調整や現場での感染予防策の徹底など、先生方・関係者のみなさまの大変なご苦労のもとで実現しましたが、弘前大学と住民の皆様との長年にわたる信頼関係があつてこそだと理解しております。

座位行動の研究はまだまだ発展途上であり、特に内臓脂肪との関係についての研究は不足しています。今後も研究を続けさせていただきます。座位行動を減らすことが内臓脂肪蓄積の予防、ひいては、健康状態の改善に寄与することを、エビデンスとともにお伝えしていくことを目指しています。

また、一日の座位行動時間を精確にモニタリングするデバイスや、個々のライフスタイルにあわせた座位行動時間を減らすソリューションを開発・提供できたらと考えております。

最後に、これまでご指導してくださった先生方、プロジェクト健診の関係者皆様に感謝申し上げます。ありがとうございます。

第28回 弘前大学医学部学術賞

特別賞

医学部学術賞（特別賞）を受賞して

麻酔科 講師 齋藤 淳一

第二十八回弘前大学医学部学術賞（特別賞）に選出いただきました研究テーマは「希釈式自己血輸血の同種血回避への効果と安全性、ヘモグロビンの生理的変動」です。希釈式自己血輸血といえば弘前大学麻酔科と認知されるまでになつた希釈式自己血輸血ですが、ここ数年日本全国多くの施設で実施され普及してきたと実感しています。二〇一六年に保険収載されたことやCOVID-19で同種血輸血の供給が不安定になつたこと、心臓手術への応用でその有用性が明らかになつてきたことなど、いくつかの要因が重なり麻酔科医のみならず外科医からも関心を得ています。多くの研究会や学会で希釈式自己血輸血をテーマにした講演やシンポジウムが開催されており、これまで希釈式自己血輸血とは無縁だった施設からも当院へ実施方法について問い合わせをいただいています。時流と重なり希釈式自



(右から) 齋藤淳一講師、諸橋一講師、水上浩哉教授 (遅野井 祥助教代理)、木下裕貴助教

己血輸血に関する研究成果が評価され、医学部学術賞の受賞へとつながったものと考えています。私は二〇〇七年に弘前大学を卒業し十六年経過しましたが、その大半を弘前大学医学部附属病院の医師として勤務してきました。初期研修の一年目を大病院で過ごした私は研究もできる臨床医として一人前になりたいと考えているようになりました。麻酔科教室の一員となつてからは毎年一本の論文を書くことを最低限の目標としてきました。大病院の医師の務めである臨床、研究、教育をきちんと勤め上げるのは決して容易

特別賞

医学部学術賞（特別賞）を受賞して

消化器外科、乳腺外科、甲状腺外科 講師 諸橋 一

この度、私は第二十八回弘前大学医学部学術特別賞を頂戴いたしました。このような名誉ある賞を頂きましたことを大変光栄に感じ、選考して頂きました先生方に深く感謝申し上げます。遠隔手術は二〇〇〇年代初頭に既にアメリカとフランスの間で行われ床医として働きながら研究論文を書きつづけるという気持ちになつたのか振り返ってみると、臨床研修一年目に書いた論文が受理された時の喜び・興奮があつたからだと思います。その喜びをもう一度味わいたいという自己満足を満たすために続けた結果、少しずつ様々な事象に気づき症例報告や研究の興味深さを知ることができるようになりました。弘前大学でしかやっていたことユニークである、という視点に基づき希釈式自己血輸血を研究テーマとして選び、淡々と研究を継続していくうちに一定の成果・評価につながりました。昨今、日本の研究力低下、麻酔科領域の研究力低下が盛んに報じられていますが、その状況に少しでも抗う力となるよう希釈式自己血輸血の研究を続け、地方から力強く発信していきたいと考えています。この度は学術賞への選出誠にあり

き出した時の感動は今でも忘れることはできません。また、同年十月には十和田市の北里大学獣医学部附属病院との間で生体（ブタ）を用いたロボット遠隔手術に成功し、通信の安全性に關して重要な報告を行いました。これら二つの社会実装実験を含め、これまでに合計六回の遠隔手術の実証実験を行い、ロボット遠隔手術の実現に向けた重要な報告を重ねて参りました。今回の研究に際し、多大なるご協力を頂きました。多岐にわたるご指導のほど宜しくお願ひ申し上げます。 学術部附属病院の関係者の皆様方、また、学内でサポートを頂きました事務の皆様方、実験の被験者のご協力を頂きました泌尿器科・産婦人科・消化器外科の先生方、そして、このような最先端研究に携わる機会を頂き、温かくご指導を頂きました袴田教授にこの場をお借りしまして厚くお礼申し上げます。今後もロボットを用いた遠隔手術を通じて地域医療に貢献して参りたいと存じますので、ご支援・ご指導のほど宜しくお願ひ申し上げます。

奨励賞

医学部学術賞（奨励賞）を受賞して

内分泌内科、糖尿病代謝内科 助教 遅野井 祥

大変光栄なことに奨励賞に選出いただきました「RAGE activation in macrophages and development of experimental diabetic polyneuropathy」では、糖尿病性神経障害の新たな病態機序を提唱することで、改訂で遠隔手術がオンライン診療に含まれることにより、遠隔手術を実施可能とする法的環境が整い、また、二〇二二年六月には日本外科学会により遠隔手術のガイドラインが策定されたことから、いよいよ遠隔手術の社会実装が現実味を帯びてきている状況です。私達は二〇二一年三月に国内初となるロボット遠隔手術の実証実験を本学とむつ総合病院の間で行い、国内の商用回線と国産ロボットを用いた遠隔手術に成功しました。弘前から約百五十キロメートル離れたむつ町のロボットを操作してロボットが動

き出した時の感動は今でも忘れることはできません。また、同年十月には十和田市の北里大学獣医学部附属病院との間で生体（ブタ）を用いたロボット遠隔手術に成功し、通信の安全性に關して重要な報告を行いました。これら二つの社会実装実験を含め、これまでに合計六回の遠隔手術の実証実験を行い、ロボット遠隔手術の実現に向けた重要な報告を重ねて参りました。今回の研究に際し、多大なるご協力を頂きました。多岐にわたるご指導のほど宜しくお願ひ申し上げます。 学術部附属病院の関係者の皆様方、また、学内でサポートを頂きました事務の皆様方、実験の被験者のご協力を頂きました泌尿器科・産婦人科・消化器外科の先生方、そして、このような最先端研究に携わる機会を頂き、温かくご指導を頂きました袴田教授にこの場をお借りしまして厚くお礼申し上げます。今後もロボットを用いた遠隔手術を通じて地域医療に貢献して参りたいと存じますので、ご支援・ご指導のほど宜しくお願ひ申し上げます。

奨励賞

医学部学術賞（奨励賞）を受賞して

集中治療部 助教 木下 裕貴

集中治療部の木下裕貴と申します。この度、弘前大学医学部学術賞（奨励賞）という大変栄誉ある賞を受賞させて頂き、選考委員会の先生方には厚く御礼申し上げます。今回の受賞論文である「The perioperative frontal relative ratio of the alpha power of electroencephalography for predicting postoperative delirium after highly invasive surgery: A prospective observational study」(Anesthesia and Analgesia誌掲載)は、高侵襲手術における全身麻酔中の脳波、随後根神経節をつまみ出し、深夜にlive imagingができました。しかし、ライフステージに伴い、研究に使える時間が有限であることと実感するようになりました。知っているのと、実感するのには遙かな隔たりがありました。今では、娘が保育園にいるせいせい八一九時間の間にどれだけのことができるのだろうか、と考えるようになりました。とはいえ、悲観的になつてはいられません。無限に時間があれば、独りで立派な基礎研究ができるか、と尋ねると、現代では否のようです。私は現在、米国のCincinnati Children's Hospitalに留学させて頂いております。ここはNatureやCellを連発する強豪研究施設ですが、どの研究プロジェクトも幅広い共同研究によって構築されています。もちろん個

人の努力は欠かせませんが、研究資料と解析方法は秒進分歩であり、初学者と専門家とは特定の解析を遂行するのに費やす時間が遙かに違うことを改めて学びました。研究室内の密な協力、他研究室や他施設との共同研究こそが、研究を推進する最大の駆動力なのだと実感しています。 本受賞を励みに、水上教授に総括していただいた本研究の水準に、自らの力で近づけるように研鑽を積んで参ります。そのために、解析能力の向上に加え、研究者コミュニティの構築に注力し、より大切なことには、同僚と家族に益々の敬意と感謝を示し、Physician, Scientist、さらには夫および父としての均衡を保ちながら、着実に前進していきたいと思ひます。 特にα波が術後せん妄を予測できるかを検討した論文です。術後せん妄の発症機序とされている脳内炎症に着目し、高侵襲かつ術後せん妄の発症率が高い食道癌・頭頸部癌根治術において、全身麻酔中の脳波および炎症性物質を経時的に測定することで炎症が全身麻酔中の脳波や術後せん妄へ与える影響を検討しました。結果として、同程度の炎症がおこる手術における術後せん妄の発症は、術中の炎症の程度よりも術前の脳の脆弱性が最も重要であることを、全身麻酔中の脳波α波の変化で示すことができました。本研究に着手した時点では加齢や術前の認知機能低下により全身麻酔中のα波が減少することがわかっていましたが、術後せん妄を予測できるとした論文はほとんどありませんでした。長時間手術の脳波・炎症性物質を経時的に測定・解析することで炎症が全身麻酔中の脳波や術後せん妄へ与える影響を検討した初めての研究と考えています。今回の受賞を励みとして、今後も全身麻酔中の脳波と術後せん妄・術後認知機能障害の研究を継続していきたいと思ひます。 最後にになりましたが、本研究の御指導頂きました当講座の廣田和美教授をはじめ、御指導御協力いただきました多くの方にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

第24回 医学部医学科国際化教育奨励賞

医学部医学科（国際化教育奨励賞）を受賞して

総合臨床研修センター 助教 市川博章

この度は、荣誉ある弘前大学医学部医学科国際化教育奨励賞を受賞させていた...



私はこの賞の支援により、米国（ハワイ）でハワイ大...

この度は、荣誉ある弘前大学医学部医学科国際化教育奨励賞を受賞して...

医学部医学科（国際化教育奨励賞）を受賞して

脳神経外科 助手 渡邊亮太

この度は、国際化教育奨励賞を受賞いたしましたの...



この度は、国際化教育奨励賞を受賞いたしましたの...

第26回 医学部附属病院診療奨励賞

医学部附属病院診療奨励賞（診療技術賞）を受賞して

女性の健康推進医学講座 助教 大石舞香

この度、「女性アスリート外来開設による青森県女性アスリート包括的サポ...



この度は、「女性アスリート外来開設による青森県女性アスリート包括的サポ...

この度は、「女性アスリート外来開設による青森県女性アスリート包括的サポ...

第26回 医学部附属病院診療奨励賞

医学部附属病院診療奨励賞（診療技術賞）を受賞して

感染制御センター 看護師長 木村俊幸

この度は、「新型コロナウイルス感染症対策に対する...



この度は、「新型コロナウイルス感染症対策に対する...



御礼申し上げます。二〇一九年十二月に中国・武漢で確認された新型コロナウイルス感染症(COVID-19)が、これまで、幾度とないウイルス変異を遂げ、現在も続く未曾有の感染症となると、当時は誰も想像していなかったと思います。感染症の歴史上、ペスト、コレラ、スペインかぜ等、世界を一変させてしまう様なパンデミックは、約百年周期で訪れるともいわれており、まさにスペインかぜから一世紀、COVID-19パンデミックが発生しました。

前例のないCOVID-19対応には、非常に困難を極めました。令和六年二月時点で感染流行は第九波を数え、その感染規模や流行株の特徴により、社会的影響は毎回異なりました。また、検査体制や治療薬、ワクチン等の開発により行政対応も刻々と変化しました。病院としては、その都度、迅速で適切な状況判断と対応が求められ、昼夜・休日関係なく、また連休も取れず院内外の対応のため尽力いたしました。

職員の皆様には、感染対策として、業務や日常生活

等全てにおいて、抑止・抑制をかけざるを得なかったのですが、皆様一人一人が患者さんのために思い、辛抱強く、献身的に日々ご尽力、ご協力いただいたおかげで、当院は重大なクラスター事例もほぼなく経過出来ております。感染管理認定看護師の仲間達の中には、激務のコロナ禍において、退職した者も少なくありません。

この度は「折り紙による壁面装飾をきっかけとした患者、家族とのコミュニケーション」という取り組みに関して、当科外来看護師の阿保恵美子さんを診療奨励賞(心のふれあい賞)に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

ナイチンゲールの「看護覚え書」において院内環境における視覚的な変化の重要性について述べられ、欧米で「Arts in Healthcare」といった枠組みで、アートが患者にポジティブな変化をきたすことが期待されております。この取り組みのきっかけは外来バックヤードへの装飾でしたが、診察室から垣間見えた装飾に関して患者、家族からも声をかけられるようになり、周囲の診療科などに了承をいただきながら、外来待合、病棟へ壁面装飾を行うようになりました。動画サイトを参考に作られた折り紙は精巧で目を引き、内容もWorld Baseball Classic

の参加メンバー、アニメキャラクターなど流行、季節に即したものを扱い、思わず会話が展開されるものでした。特に外来での会話は、疾患、検査、治療についての話が中心となり、時には画一的で、実務的となり、患者側としては緊張のつくものになりがちです。壁面装飾をとおして、趣味、嗜好などパーソナルな内容が共有される機会も多くなり、「来院の緊張をほぐしてもらえた」、「スタッフに親近感を感じることができた」など感謝の投書を多数いただきました。

被推薦者の阿保さんは当科外来のほかに外来化学療法室を担当するなど、長年、心的負荷が強い外来患者に接し、多忙な外来業務の合間をみても、患者に声をかけるなどして不安を和らげておりました。今回は当科、看護、事務スタッフの多くから被推薦者を推す声があり、代表して推薦させていただきます。これは壁面装飾のみではな

りませんでした。私が今も業務を続けていられるのは、病院長を始めとした、職員の皆様のご協力のおかげと思ひ、心より感謝申し上げます。

この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

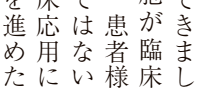
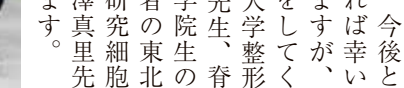
この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

この度は「心のふれあい賞」に選出いただき、推薦者として心より感謝申し上げます。

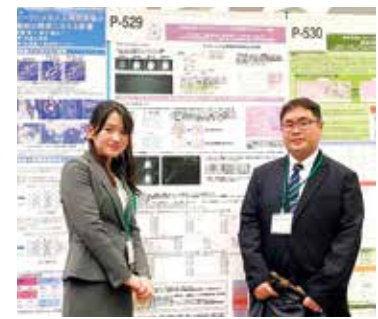


助成金B

第42回唐牛記念医学研究基金 (助成金B) を受賞して

病理生命科学講座 助教 後藤 慎太郎

このたびは伝統ある唐牛記念医学研究基金を賜り、大変光栄に存じます。基金設立者の故唐牛敏世氏と、みちのく銀行様の長きにわたる本学へのご支援に厚く御礼を申し上げます。また、選考委員の先生方、式典開催の関係者の皆様、ご指導いただいた教室の諸先生方に深く感謝を申し上げます。



この度、歴史ある唐牛記念医学研究基金より助成いただけることとなり、大変光栄に存じます。関係の皆様方には厚く御礼申し上げます。

今回助成を頂きました研究課題は、「腫瘍術前化学療法による癌微小環境の病理学的特性と深層学習を用いた画像解析」です。癌は癌細胞だけではなく周囲の間質や血管などの癌微小環境で構成されています。近年、化学療法によって癌細胞だけでなく癌微小環境

も大きく変化していることが明らかとなり、このような癌の治療効果に直結する病理学的変化を、放射線画像で捉える手法を開発するのが本研究の目的です。また、私どもの病理学分野では、人工知能AIの導入が比較的遅れていましたが、AIと親和性の高い放射線

私は令和五年度より本学医学研究科ゲノム生化学講座に所属し、ゲノム生化学講座の助教として着任いたしました。専門はゲノム科学ですが、これまで植物を研究対象としてきたこともあり、本研究課題も「ハネモ」という海藻を扱ったものとなります。名前の通りハネモ(羽)のような形をもち、系統的には沖縄特産のウミブドウが近縁です。近年になって、ハネモのもつある種のタンパク質が、肺がん細胞の増殖抑制作用を持つ

助成金B

第42回唐牛記念医学研究基金 (助成金B) を受賞して

ゲノム生化学講座 助教 畑 貴之

この度は第四十二回唐牛記念医学研究基金助成金を賜り大変光栄に存じます。故唐牛敏世氏、株式会社みちのく銀行様、また医学研究科研究推進委員会の選考委員の皆様へ感謝申し上げます。私は「腫瘍細胞の亜集団コントロールによるB細胞を介した免疫着療法

ことが報告されました(PMID: 36547923)。実は、ハネモに限らず海藻は、抗がん作用や抗肥満作用といった生理活性物質の新たなソースとして期待が高まっています。本研究では、ハネモのゲノム解析や遺伝子操作技術の開発から、新規生理活性物質の探索や海藻の医薬産業利用への端緒としたいと考えております。

本研究は腫瘍だけでなく様々な癌にも応用が可能です。今後も画像診断とリンクした癌診療に役立つ病理学研究を展開してゆきたいと思っております。ご指導ご協力の程宜しくお願い申し上げます。

この度は第四十二回唐牛記念医学研究基金助成金を賜り大変光栄に存じます。故唐牛敏世氏、株式会社みちのく銀行様、また医学研究科研究推進委員会の選考委員の皆様へ感謝申し上げます。私は「腫瘍細胞の亜集団コントロールによるB細胞を介した免疫着療法

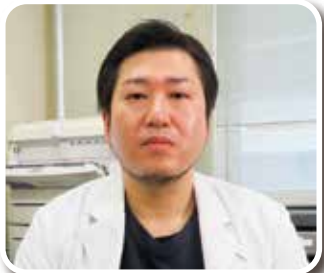
助成金B

第42回唐牛記念医学研究基金 (助成金B) を受賞して

消化器外科、乳腺外科、甲状腺外科 医員 原 裕太郎

医学研究科ホームページで公開中!

紹介動画はこちら ↓



助教 村澤 真吾 (内分泌代謝内科学講座)

医学研究科では、各講座で研究されている40歳未満の若手研究者に、現在取り組んでいる研究内容や、研究を志したこれまでの経験を自ら紹介いただくことで、他の若手研究者や学部学生の研究に対する意欲を養うことに加え、紹介した若手研究者自身のモチベーションを向上させることを目的として、「研究者紹介動画」を作成・公開する取り組みを始めました。

第5回目は内分泌代謝内科学講座の村澤真吾(むらさわしんご)先生。『CRFニューロンに共存するAVPの役割』についての研究をご紹介します。

この度は第四十二回唐牛記念医学研究基金助成金を賜り大変光栄に存じます。故唐牛敏世氏、株式会社みちのく銀行様、また医学研究科研究推進委員会の選考委員の皆様へ感謝申し上げます。私は「腫瘍細胞の亜集団コントロールによるB細胞を介した免疫着療法

この度は第四十二回唐牛記念医学研究基金助成金を賜り大変光栄に存じます。故唐牛敏世氏、株式会社みちのく銀行様、また医学研究科研究推進委員会の選考委員の皆様へ感謝申し上げます。私は「腫瘍細胞の亜集団コントロールによるB細胞を介した免疫着療法

学生だより

学生だより クリニカルクラシックを終えて

クリニカルクラシックを終えて

医学科六年 奥 寺 真子

医師国家試験が終わわり、クリニカルクラシックを振り返りながら執筆しております。五年生の実習は、外病院の外科から始まり、初日から手術に入らせていただき、臨床現場に流れるスピード感に圧倒され、一日の密度の濃さに驚きました。先生方や医療従事者の方々は、私を「学生」としてではなく「チーム医療に携わる一員」として温かく「指導ください、student doctor」としての

らない点が多いのですが、これからも学び続けたいと思います。更に実習班での行動を通して、お互いを気遣いながら助け合いコミュニケーションをとる大切さを学びました。日頃からの挨拶やコミュニケーションが連携につながり、チーム医療の支えになると実感しました。

クリニカルクラシックを終えて

医学科六年 澤 谷 俊之介

私覚を新たにしました。二年間の臨床実習で大切にしていたことは、患者さんとのコミュニケーションや診察、カルテの記載を丁寧に書くことです。先生方の診察を通して学びながら、模索する日々でした。少しずつ患者さんの訴えに応じた診察を行えるようになり、前よりも症状の変化や感情の機微をお話してくださった時は、とても嬉しかったです。最初は時間が経たないうちに、丁寧に診察し自分でも、アセスメントする

クリニカルクラシックを通じて、医学知識や技術面はもちろんのこと、医師として果たすべき役割や大切にしなければいけないことを実際に目撃し、聞いたりすることで学ぶことができました。また、複数の職

クリニカルクラシックを通じて、医学知識や技術面はもちろんのこと、医師として果たすべき役割や大切にしなければいけないことを実際に目撃し、聞いたりすることで学ぶことができました。また、複数の職

(次ページへ続く)

(前ページより)
種の方と関わることで多様な価値観に触れることができ、自分には無かった考え方を吸収できたことも非常に大きな経験となりました。クリニカルクラークシップにより、自分が目指すべき医師像がより具体的なものとなりました。これらの経験を糧に医師として研鑽し、医療スタッフや患者さんと信頼関係を築き、よりよい医療を提供していくことで患者さんに還元していければと強く思いました。お世話になった先生方を始め、医療スタッフや事務の方々など、クリニカルクラークシップに携わっていただいた方全てに心より感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

大学院生だより

研究室紹介

(血管・炎症医学講座)

大学院一年 立崎真幸

令和五年度より血管・炎症医学講座に所属しております。立崎真幸と申します。令和六年一月より講座名が脳血管病態学講座から変更になりました。当講座では炎症や自然免疫をテーマとして、大動脈弁、腸管、肝臓、気道、滑膜、腎臓の研究をしており、呼吸器内科から二人、整形外科から一人、合計四人の大学院生が所属しています。

私は令和三年に弘前大学を卒業後、青森県立中央病院で二年間の初期研修を経て、現在は当講座の助手兼大学院生として、腎臓のウイルス感染における自然免疫応答について研究をしております。研究をしており、まだ研究を始めて一年目であり、今泉教授をはじめ周囲の先生方の手を借りながらなんとか研究をしているという状態です。まだほんの少しの成果しか出ていませんし、論文投稿も苦戦中ですが、実



験結果を見るときはワクワクしますし(たいていは実験結果を見てがっかりすることの方が多いため)、研究の楽しさを実感しつつあります。研究の道に進んだきっかけとしては、初期研修二年目の四月に当講座の助手の募集を見たことでした。募集の知らせを見た際に、初期研修後の進路としてこんな選択肢があったのかと気づかされ、直感的に「これだ!」と思い、基礎研究への道を選んだ次第です。ほとんど同期が臨床へ進む中で、基礎に進むというのは勇気のいる決断でしたが、研究を始めて一年が経った今振り返ってみるとなかなかいい決断をしたかと自画自賛しています。研究の道へ進むもと思いついたのは、産婦人科医になりたいと考えていました。弘前大学産科婦人科講座には学生の頃からお世話になっており、現在でも週に一度お邪魔させて頂いております。ですので、いつかは産婦人科疾患に関わる研究をしたいとも考えています。大学院の卒業までまだ数年ありますので、小さくても新知見を積み重ねられるよう日々研究に励んでまいります。

大学院生だより

研究室紹介

(呼吸器内科学講座)

大学院一年 小山 新太郎

内科専攻医二年目、呼吸器内科・感染症科に所属しています。小山新太郎です。平成元年生まれで長男なので新太郎で、次男は宏次郎です。私は医学研究科1年生でもあり、研究室紹介とお話を頂きましたので、私の理解している範囲でお伝えします。現在、医学医療情報学講座に所属しております。

臨床を中心に行いながら、研究の準備を進めている状況です。来年度からはより研究活動に重点を置く予定です。呼吸器内科・感染症科ではいくつかの基礎講座で大学院生は研究を行っており、公衆衛生に興味があることを田坂教授にお話ししたところ、こちらの講座に繋いで頂き現在に至ります。正直な話をして先生方には大変申し訳ないのですが、行くとなつて初めて講座の存在を知りました。すみません。場所は大学病院の地下一階で、学会用の大きなポスターを印刷できる所にほど近いです。研究室研修の生徒さんも出入りしています。元々、大学病院の医療情報部が大学院重点化の方針によって改組されたもので、恐らく私が学生の頃にはまだ存在していなかったと記憶しています。ホームページを見てみると、病院・診療情報のIT化、ネットワークセキュリティ機構、AI、がん登録データの解析手法に関する研究を行っているとのこと、医療情報部としての機能を持つのもそれら研究も行っています。私の活動に関して言うと、青森県立中央病院、八戸市立市民病院にも協力を依頼し、県のがん登録データを使わせて頂いて、肺癌に関するデータで研究を行う準備をしているところです。右も左も分からず、松坂方士先生、田中里



弘前大学医学部附属病院麻酔科の紺野真緒と申します。私は青森県出身で弘前大学を卒業後、青森県立中央病院で二年間の初期研修を修了し、当医局に入局いたしました。現在麻酔科医としては八年目になります。当麻酔科学講座では手術部での麻酔管理を行う臨床麻酔分野、集中治療室で重症患者を管理する集中治療分野、外来・病棟で痛み治療を行う緩和ケア・ペインクリニック分野があります。私は臨床麻酔の他に、主に緩和ケア・ペインクリニックに従事しております。この分野に興味をもつ麻酔科医は少なく、マイナーな麻酔科の中でもさらにマイナーな分野と思われると思います。

緩和ケアとペインクリニックは違うものなの?と医師になりたての頃の私も含めて、明確な違いがわからない方も多数いると思われ、またこの場をお借りしてお伝えします。ペインクリニックは「症状や身体所見から多角的に痛みの原因を突き止める」というのが特徴です。この特徴から、緩和ケアとペインクリニックは、主として癌疾患を対象として、身体の痛みだけではなく幅広い側面から生活の質を維持・向上させる治療をいいます。当院では平成十九年四月に、麻酔科医師、精神科医師、認定看護師、臨床心理士、薬剤師、管理栄養士、がんサロニスタップなど多職種で構成さ

若手教員・医師だより

緩和ケアとペインクリニックってどう違うの?

麻酔科 助手 紺野真緒

因を診断し、薬物療法だけでなく神経ブロックを始めとする各種の治療法を駆使して、痛みを軽減・消失させQOLを向上させる(日本ペインクリニック学会HPより)。「癌以外の原因による痛みを神経ブロック等で治療する領域となり、一方緩和ケアは「生命を脅かす疾患による問題に直面している患者とその家族に対して、痛みやその他の身体的問題、心理社会的問題、スピリチュアルな問題を早期に発見し、的確なアセスメントと対処(治療・処置)を行うことにより、苦しみを予防し、和らげることで、QOLを改善するケア(WHOより)」といわれ、主に癌疾患を対象として、身体の痛みだけではなく幅広い側面から生活の質を維持・向上させる治療をいいます。当院では平成十九年四月に、麻酔科医師、精神科医師、認定看護師、臨床心理士、薬剤師、管理栄養士、がんサロニスタップなど多職種で構成さ

れる緩和ケアチーム(PCIT)が発足し、患者やご家族の様々な苦痛に対して支援を行うチーム医療を実践しています。我々麻酔科医はその専門知識を生かし医療用麻薬の調整や神経ブロックを行うことで、患者が無事に治療を完遂し、希望をもって良い時間を長く送れるようサポートをしております。研修医時代、まだ専門的な知識はないものの「患者さんの痛い場所に応じて全身の神経をブロックができたら便利だろうな」と考えていたことや、素晴らしいペインクリニックである師匠との出会い、言葉やしぐさから患者の苦痛を察しアプローチする尊敬すべき緩和ケアの



産休直前に教室員の方々と

先輩医師との出会いから、導かれるように私はこの領域を専門として選択しました。

現在子育てと仕事にせわしない毎日ですが、息子(三歳)は無事に成長しており、私自身も目標としていた麻酔科専門医、緩和ケア認定医、ペインクリニック専門医を取得することができました。また苦節〇年の大学院も卒業がみえてきました。これらはすべて理解のある職場の皆様、麻女会、家族の協力のおかげです。本当に感謝しております。今後もさらに自身の研鑽に努め、後進の育成にも積極的に取り組みしていきたいです。

若手教員・医師だより

若手教員・医師だより

泌尿器科 助手 富樫 越

弘前大学泌尿器科専攻医四年目の富樫越(キョウ)です。漢字が難しく、たまに日本人ではないという疑いをかけられますが純日本人です。越という字は「タケシ」とか「キョウ」と打つと出てきます。※「キョウ」と打ってもでません。秋田県大館市出身で好きな食べ物はきりたんぽ、好きな犬は秋田犬です。部活動は小、中は野球、高校ではバドミントン、大学ではソフトテニスと小さめの球技で育ってきました。経歴は大館鳳鳴高校を卒業後、弘前大学に入学、むつ総合病院で二年間研修医として勤務した後、弘前大学医学部附属病院、つがる

総合病院、むつ総合病院と渡り、二〇二三年四月から大学で勤務しています。今回医学部ウォーカーへ寄稿するにあたり、入局の経緯や実際に入って感じたことについて書いていきます。まず入局の経緯ですが、自分が泌尿器科に決めたタイミングは、大学四・五年くらいだったかなと思います。理由のひとつは泌尿器科には多彩なスペシャリティがあるという点です。悪性腫瘍や腎移植、腎不全、結石や肥大症などの良性疾病、男性不妊や小児泌尿器科など、分野が多岐にわたっており、飽きっぽい自分でもなにか興味をもつ

(次ページへ続く)



研究室紹介

前回の医学部ウォーカーへの寄稿から四年半ほど経過しました。教室員の構成は令和六年一月現在で教員二名、技術補佐員三名です。大きな変化は令和四年、医師スタッフ(令和二年本学卒業)を助手兼大学院生として迎えたことです。地域枠での入学ですが、医学研究科・県をはじめとする関係各所のご理解・ご協力をいただき、無事採用となりました。私が着任してから七年目ですが、よく医師複数名体制となつたことへの安堵に加え、法実務を地域医療の一環として研究科・県に認めていただけたことへの感謝の念を覚えております。彼は現

在大学院二年目として、実務・研究につき修練を重ねているところですが、無事に学位・資格を取得できるよう、こちらも指導を行っております。

この四年半の間にCOVID-19の流行が発生し、解剖施設としての当講座にも社会的な試験が訪れました。SARS-CoV-2陽性の解剖についてはその是非の判断に始まり、解剖参加者の感染防御対策、解剖環境の消毒を慎重に行うこと、なんとか二次感染を起こさず、現在に至っております。これに関係し、平時は青森県ではほとんど行っていないのですが、有事ということでも警察署に出向き遺体観察やCT読影を行い、検視(検案)についてもアドバイスすることもありました。

一方、解剖依頼がCOVID-19によって控えられることは全くありませんでした。令和に入っても解剖件数は年二百五十〜三百前後を推移し、令和五年は猛暑もあり、過去最多の三百十二件を数えました(平成二十七年に私が着任してから現在までの解剖数は二千二百件を超えております)。本学の司法解剖の件数が全国でも五本の指に入るといふ状況は変わっており、死因究明に対する青森県警の積極的な姿勢が継続していることの現れといえます。スタッフが一丸となつて解剖や検査等に携わっているのはもちろんですが、マンパワー不足解消とはなかなかないことから、青森県警の方々には関係各

所との調整や解剖補助・記録など、さまざまな形で協力いただいております。さらに本県では従来と変わらぬ、救急病院や青森県警察医会の先生方が、画像診断も含めた死後診断に積極的にかかわってくださっています。本稿を借りて厚く御礼申し上げます。

研究面では技術補佐員の尽力のもと、免疫染色に関する設備・体制が整いつつあります。令和四年には高橋のテーマである急死・遷延死の鑑別研究の一環として、法医解剖例における骨髄マクロファージの形態変化に関する論文を上梓することができました。本研究も兼ねつつ、大学院教育も展開していきたいと考えております。また法医学においては症例報告が非常に重視されていることから、興味深い法医解剖事例につき積極的に論文報告・発表を行う姿勢も堅持しております。

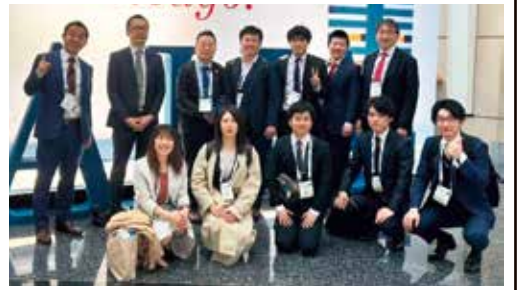
令和四年度より青森県死因究明等推進協議会も始動し、異状死体全般について

法医学講座

教授 高橋 識志

(前ページより)
て取り組める分野があるだろうと考えました。また、フレンドリーな雰囲気も非常に魅力的で入っても後悔しない科だと考えました。入局して一〜二年は仕事に追われ余裕がありませんでしたが、今は経験を重ね色々なことが楽しくなってきました。手術も初めは小手術から始まり、今は腹腔鏡や開腹手術も上級医の指導のもと経験させていただき充実した日々を送っています。移植やロボット手術は術者で行うことはありますが、今後安心して任せられるように研鑽を積みみたいと思います。また(時々仲が悪い人もいますが)、基本的には入局前の印象通りかそれ以上に雰囲気の良い科だと感じています。二〇二四年は畠山新教授の

と八名の新人が入る予定です。さっそく全員海外学会に連れて行くそうです。頑張るときは頑張る、休む時はしっかり休める(緊急も少ない)、QOLもやりのある科です。興味がある学生、研修医の皆さんぜひお待ちしております。



2023年 American urological association (AUA)

この四年半の間にCOVID-19の流行が発生し、解剖施設としての当講座にも社会的な試験が訪れました。SARS-CoV-2陽性の解剖についてはその是非の判断に始まり、解剖参加者の感染防御対策、解剖環境の消毒を慎重に行うこと、なんとか二次感染を起こさず、現在に至っております。これに関係し、平時は青森県ではほとんど行っていないのですが、有事ということでも警察署に出向き遺体観察やCT読影を行い、検視(検案)についてもアドバイスすることもありました。



内分泌代謝内科学講座

教授 藤田 征弘

青森県の健康長寿を目指して

内分泌代謝内科学講座は一九七一年に旧内科学第三講座として開設され、後藤由夫先生が初代教授として着任されました。一九七七年に第二代教授として武部和夫先生、一九九五年に第三代教授として須田俊宏先生が就任され、二〇〇七年に大学院大学移行に伴い、弘前大学大学院医学研究科内分泌代謝内科学講座と改称されました。二〇一三年に第四代教授として大門眞先生が就任されて、二〇二一年には講座開講五十周年を迎えました。

この間、日本糖尿病学会、日本内分泌学会の年次学術集会や糖尿病学の進歩などを主催しました。

糖尿病、内分泌代謝疾患は、「内部環境のホメオスタシス(恒常性)の破綻」を基本概念とする全身性疾患で、総合的に「全身を診る」ことが求められています。残念ながら、青森県は全国一の短命県で、かつ糖尿病患者が多い県です。糖尿病は感染症・悪性疾患・心血管疾患の発症や増悪に深く関わっており、青森県の糖尿病診療を改善することが短命県から脱出の第一歩だと考えております。さらに、内分泌代謝疾患は県内で専門医/専門施設が少なく、希少な疾患も多く存在することから、診断・治療において大学病院が青森県だけでなく秋田県東北を含んだ地域の重要な役割を担っております。



津軽には「黙って降る雪は余計に積もる」ということわざがあると新聞に書いてあった。確かに、こちらで生活していると雪の日は特に静かである。九州出身の私にとっては、雪の日は寒さよりも静けさをより感じる。逆に、積雪に馴染みのない地域では、雪は大騒ぎイベントのひとつであり、雪が降り積もるに従い、テレビをはじめ、街は騒がしくなる(以前に海外留学生が、初めて見た雪に感動し、奇声を上げて走り回っていた)。雪を静かに楽しむのは、青森県生活の特権だと思う。特に大雪の夜の静寂は心地よい。子供の頃にワクワクして読んだ雪女の伝説が蘇ってくる。私はウィンタースポーツはやらない。ただ、つまり、生活が制限されている方々には大変心苦しいが、雪が好きだ。夜明けとともに日の

大学の最大の使命は、将来の医療を担う医療人の育成です。当講座は歴史的に視床下部・下垂体・副腎系の内分泌学の研究/臨床においては日本でも指折りの施設です。また、慢性膵炎や臨床栄養学の分野ではガイドライン作製など診療を牽引して参りました。今後私の研究テーマであるインクレチン/インスリン分泌を含めた糖尿病、脂質代謝において臨床/研究に邁進していきたいと思っております。さらに知識を得ることの面白

さに気づく雰囲気作り、場所作りに努めるとともに、広い視野や高い目標を兼ね備え、生命科学・医学の発展に寄与する基礎・臨床研究を推進できるリサーチマインドを持った国際基準の「Scientific Physician」の育成に努めていきたいと思っております。結果として、明日の青森、弘前大学を創る医療人の育成、特にリーダーシップを発揮できる次世代の人材育成、加えてリーダーを育成できる医療人

コラム

医学部こぼれ話

光がとどく朝など、一面に白い視界が広がる。老眼の私には奥行きすら感じない。とにかく全部が真っ白で、家や橋やビルがもともとは何色だったか、そもそもそこに何があったか想像するだけで楽しい。岩木山の雪化粧がはつきり見える朝などは、職場に奇跡のような幸運が舞い降りるのではないかと途方もない妄想をしてしまう。

さて今年は一月中旬過ぎたのに雪の少ない冬が続く。心なしかラーメンやコーヒーマグが物足りない。「今年は何となくいいですね」「毎年、これだと良いですね」などと話しかけられることも多い。それにあいつちを打ちながら、残雪で足を滑らせてみたりする。「今年は何となくいいですね」と喜ぶ声や、雪まつりを心配する子供の陰で、こんな雪フリークもいるのだ。

(次ページへ続く)

(前ページより)
 (指導者)を育成します。
 旧内科学第三講座の同門
 会は「えんれい会」と言
 いますが、これはユリ科の
 エンレイソウ(延齢草)に
 由来します。エンレイソウ
 の花言葉は「叡智」「奥ゆ
 かしい美しさ」です。当講座
 は叡智を結
 集して地域
 の病める人
 と寄り添い
 ながら、青
 森県の健康長寿(延齢)に
 貢献していきます。今後と
 もご指導、ご鞭撻のほど宜
 しくお願ひします。



部活動紹介

軽運動サークルLEEC

医学科二年 金子裕貴

この度、軽運動サークルを立ち上げることとなりました。私は学士編入で二〇二三年四月に医学科に入りました。昔から体を動かすことが、楽しいことが好きで、入学した当初も自分の入学後の生活をどう過ごしていくかについて様々に思いを巡らせていました。実際に色々な部活に見学に行き、とても魅力的な部活が多い中、入学直後から既に解剖学で忙しくなり始め、学業面での不安も同時に感じ始めていました。「学業に支障が出ないように、でも運動をしたい時にだけできるような団体があればいいな」という話を友人に話したのが団体設立のきっかけでした。

このサークルは「軽」運動という名前の通り、楽しく行える範囲の運動を、比較的短時間で、行うことをメインに考えています。まだ活動して間もないですが、ここ最近行った種目としてはドッジボールやバスケットボール、バドミントンなどを皆で行いました。ドッジボールに至っては、人によっては小学生以来な人も多く、意外と大人になってもやってみたいものがあります。鬼ごっこや缶蹴りといった、中高の部活動での経験値ではあまり差がつかないような種目を行うことも今後していきたいと思っています。また、春から秋にかけて雪が降らないような季節には、大学外での活動も考えています。例えばハイキング等の季節を楽しみたいイベントや、ボーリングをしにくく大会等も不定期に開催していきたいらより楽しくなるのではないかなといった具合です。活動頻度は今のところ月に二回ほど考えていますが、今後の活動内容や人数によってはまだまだ調整していくつもりです。そして設立当初の目標通り、学業に不安があれば学業に集中できる、同じサークルの仲間と勉強の仲間についても相談できる、そんな団

弘前スラックラインサークル

医学科三年 大久保 智 哉

弘前大学スラックラインサークルは現在十名で活動しています。令和五年十一月に発足した新設のサークルです。週一回の活動を目標としており、体育館で活動予定ですが、現在はスラックラインのイベントの手伝いやボランティアの参加、大会の出場を目標に努めています。

スラックラインは競技性も高く、毎年世界大会が開催されるほど盛り上がりを見せています。ラインの上で、より難易度の高いトリックをつなげてコンボを重ねていくことでその点数を競います。日本は男女ともに世界チャンピオンを多く輩出している強豪国で、日本の大会で

世界最高峰の技をみることもできます。上級者を目指そうと思っただけに、身近に目標があるのは利点だと思います。



弘前大学クライミングサークルCLIRO

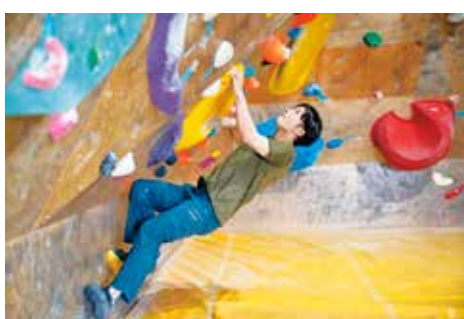
医学科四年 浦崎 宏也

『弘前大学クライミングサークルCLIRO』は、ボルダリング・リードクライミングをみんなが楽しむことを目的として活動しており、医学部学友会所属ながらも所属している学生の学部は様々、現在二十六名(医学部医学科十二名、女性六名)が所属しています。

実は二〇二三年十一月に大学登録を果たした新しいサークルです。つい二三年前まで、クライミングを趣味とする弘前大学生は片手で数えられるくらいしかおらず、私もその一人でした。その片手で数えられる程度



思います。このように初心者から上級者まで楽しめるこのスポーツを、より多くの人に体験してもらいたいと願っています。青森県内では毎年多くのスラックラインのイベントが開催されており、当サークルも積極的に参加していく予定です。もし少しでも興味をもってくださった方には、是非足を運んでいただけてスラックラインを楽しんでいただ



の学生同士の交流があるかと言え、みんながみんな知り合いという雰囲気ではなく、時間を合わせてみんなで登るといったことはありませんでした。その一方で、クライミングを体験したこととはあるけど続けてい

医学部分館ミーティングルーム・コモンズスペース設置

附属図書館 医学部分館 主任 藤井 真嗣

令和5年度の予算要求で「医学部分館のミーティングルーム・ラーニングコモンズの設置」を要望したところ予算措置が講じられました。それを受けて設置作業を行い1月に完成しました。



分館1Fに防音効果の高い密閉型のパーテーションとスタッキングデスクとチェアを設置しミーティングルームとしました。また、1Fカウンター前の閲覧席をPCデスクからミーティングルームと同じスタッキングデスクとチェアを設置し、利用者の要望に合わせて移動や配置が自由にできるようにしました。

ミーティングルームについては法律や規則に反しない限り用途は限定しません。授業、演習、会議、講演、サークル・部活動のミーティングなどのほか、予約が無い日は閲覧席として開放します。

またラーニングコモンズスペースでは個人学習のほか、テーブルの組み合わせを変えて小グループでの勉強会や公開講演会などにも利用できます(スペースを占有する場合は事前にご相談をお願いします)。なお、飲食のルールには変更はありません(蓋付の容器に入った飲料以外の飲食は禁止です)。

ミーティングルームの利用にあたっては、利用希望日の前日ま

でに図書館の電子サービス「My Library」の施設予約サービスからオンラインでお申し込みいただくか、医学部分館まで直接お申込みください。



「My Libraryからの申込方法」解説動画
<https://youtu.be/YXpbBrBqSpg>

ミーティングルーム・ラーニングコモンズの設置により

- 1) 組み合わせ可能な小型の学習机を数多く用意することで大机を一人が占有することがなくなり、座席利用効率上がる。
- 2) 容易に机や椅子の移動ができるため、空調の吹き出し口付近など利用者が快適な位置での学習が可能になり、不快感を軽減できる。
- 3) 気密性の高いスペースが増えることで酷暑酷暑時でも快適な室温を保てる座席が増える。
- 4) 講座や病院部局からのミーティングスペースへの需要を満たし、研究活動を促進する。
- 5) 電子的資料など図書館から持ち出しできない資料を利用した授業や研究活動が可能になる。

などのメリットがあります。分館でも利用者講習会など開催する予定ですので、たくさんのご利用をお待ちしております。

お問い合わせ・利用の申込先

「弘前大学附属図書館医学部分館」

内線：5231

E-mail: jm5231@hirosaki-u.ac.jp 担当：藤井

ないという学生は多く、「みんな一回は興味を持つけどやり方がわからず離れていく」という背景も肌で感じています。熱烈な興味がないければ、わからないうからあきらめることはよくあることです。そこで、二〇二二年十月に有志学生で

集まって活動を開始し、新しいという学生は多く、「みんな一回は興味を持つけどやり方がわからず離れていく」という背景も肌で感じています。熱烈な興味がないければ、わからないうからあきらめることはよくあることです。そこで、二〇二二年十月に有志学生で

的に木曜日(十九時〜二十時)の活動が中心です。月曜日(十九時〜二十時)と土曜日(十四時〜十七時)も活動をするときもあります。活動頻度が八〜九回/月となるように活動しています。主に平川市のスパロウズクライミング(次ページへ続く)



写真1

時の流れは速いものでもう一年近く前のことになりましたが、NHKのTV番組「あしたが変わるトリセツショー」のディレクターの方から「リンパのトリセツ」を題材とした番組の制

生体構造医学講座 教授 下田 浩

「あしたが変わるトリセツショー」と「世界一受けたい授業」に出演して



(前ページより) ジムで活動しており、集まって車で向かうことで交通手段を確保しています。部員の中にはクライミングジムスタッフを始めとしてスキルを教えられる人がたくさんいます。最後にこちらをご覧になっている学生の方へ。新入生の皆さんはもちろん、上級生の皆さんでも興味があります。是非ご連絡ください！(実はクライミングは全身運動なので筋トレ目的で来る人もいます。)

作協力についてご連絡を頂きました。実はリンパを扱ったNHKの番組に関するはこれで三度目でしたが、今回はスタッフの方々の熱量がこれまで以上に高く、三か月にわたる撮影となりました。その中でリンパの模型を作ってリンパの流れを実演する企画が生まれて、当時は解剖学を履修していた学生さんにお手伝いをお願いしました。その撮影では途中模型が壊れるといったハプニングがありました。学生さんとも楽しい時間を共有させて頂きました(写真1)。昨年六月二十二日の放送後は皆さんの方からお声がけを頂き、私



写真2

の研究信条である「beauty is truth, truth beauty」が番組内でクローズアップされたため、見知らぬ方が「美しい世界をありがとうございませう」との言葉を添えてTVで流れた私のデータ画像を葉書(写真1右上)にして送って下さったこともありました。当番組は有難いことに好評だったらしく、この一月には改訂版が放送されました。

トリセツショーの放送を受けて日本テレビの番組「世界一受けたい授業」(昨年十一月十一日放送)でリンパをテーマにしたことと要望でご連絡を頂き、十月十四日汐留のスタジオで番組収録を行いました。早朝の新幹線で台本を幾度も反芻し、打ち合わせ、リハーサル等を重ねて本番に挑むも、やはり番宣のセリフを囁んで一人取り直し、深夜に帰宅という一日でした。編集の上五分程の出演(写真2)でしたが、これも後日多くの方からお声がけを頂きました。私のような凡庸な解剖学者をこの度お引き立て下さいました皆様には改めて心より御礼申し上げます。

人事異動 (R5.12.1 ~ R6.2.29)

● 医学研究科所属

【昇任】

| 発令日 | 所 属 | 職 名 | 氏 名 | 前 所 属 |
|---------|-------------|-----|-------|---------|
| R5.12.1 | 先進血液浄化療法学講座 | 准教授 | 山本 勇人 | 泌尿器科 講師 |
| R6.1.1 | 皮膚科学講座 | 准教授 | 松崎 康司 | 皮膚科 講師 |

【採用】

| 発令日 | 所 属 | 職 名 | 氏 名 | 前 所 属 |
|---------|------------|-----|------|--------------------|
| R5.12.1 | 医療データ解析学講座 | 准教授 | 山口 亨 | 花王株式会社ヘルス&ウェルネス研究所 |

【配置換】

| 発令日 | 所 属 | 職 名 | 氏 名 | 前 所 属 |
|--------|------------------------------|-----|---------|-----------------------------|
| R6.1.1 | 附属バイオメディカルリサーチセンター 脳神経病理学講座 | 教授 | 若林 孝一 | 附属脳神経血管病態研究施設 脳神経病理学講座 教授 |
| R6.1.1 | 附属バイオメディカルリサーチセンター 血管・炎症医学講座 | 教授 | 今泉 忠淳 | 附属脳神経血管病態研究施設 脳神経病理学講座 教授 |
| R6.1.1 | 附属バイオメディカルリサーチセンター 脳神経生理学講座 | 教授 | 上野 伸哉 | 附属脳神経血管病態研究施設 脳神経生理学講座 教授 |
| R6.1.1 | 附属バイオメディカルリサーチセンター 脳神経内科学講座 | 教授 | 富山 誠彦 | 附属脳神経血管病態研究施設 脳神経内科学講座 教授 |
| R6.1.1 | 附属バイオメディカルリサーチセンター 分子生体防御学講座 | 教授 | 伊東 健 | 附属高度先進医学研究センター 分子生体防御学講座 教授 |
| R6.1.1 | 附属バイオメディカルリサーチセンター 病態薬理学講座 | 教授 | 村上 学 | 病態薬理学講座 教授 |
| R6.1.1 | 附属バイオメディカルリサーチセンター 分子病態病理学講座 | 教授 | 水上 浩哉 | 分子病態病理学講座 教授 |
| R6.1.1 | 糖鎖工学講座 | 准教授 | 柿崎 育子 | 附属高度先進医学研究センター 糖鎖工学講座 教授 |
| R6.1.1 | 附属バイオメディカルリサーチセンター 脳神経病理学講座 | 准教授 | 森 文秋 | 附属脳神経血管病態研究施設 脳神経病理学講座 教授 |
| R6.1.1 | 附属バイオメディカルリサーチセンター 脳神経内科学講座 | 准教授 | 村上 千恵子 | 附属脳神経血管病態研究施設 脳神経内科学講座 准教授 |
| R6.1.1 | 附属バイオメディカルリサーチセンター 病態薬理学講座 | 准教授 | 丹羽 康貴 | 病態薬理学講座 准教授 |
| R6.1.1 | 附属バイオメディカルリサーチセンター 分子生体防御学講座 | 講師 | 三村 純正 | 附属高度先進医学研究センター 分子生体防御学講座 講師 |
| R6.1.1 | 糖鎖工学講座 | 助教 | 米山 徹 | 附属高度先進医学研究センター 糖鎖工学講座 助教 |
| R6.1.1 | 糖鎖工学講座 | 助教 | 須藤 晋一郎 | 糖鎖工学講座 助教 |
| R6.1.1 | 附属バイオメディカルリサーチセンター 脳神経病理学講座 | 助教 | 三木 康生 | 附属脳神経血管病態研究施設 脳神経病理学講座 助教 |
| R6.1.1 | 附属バイオメディカルリサーチセンター 血管・炎症医学講座 | 助教 | 瀬谷 和彦 | 附属脳神経血管病態研究施設 脳血管病態学講座 助教 |
| R6.1.1 | 附属バイオメディカルリサーチセンター 血管・炎症医学講座 | 助教 | 川口 章吾 | 附属脳神経血管病態研究施設 脳血管病態学講座 助教 |
| R6.1.1 | 附属バイオメディカルリサーチセンター 脳神経生理学講座 | 助教 | 古川 智範 | 附属脳神経血管病態研究施設 脳神経生理学講座 助教 |
| R6.1.1 | 附属バイオメディカルリサーチセンター 脳神経生理学講座 | 助教 | 下山 修司 | 附属脳神経血管病態研究施設 脳神経生理学講座 助教 |
| R6.1.1 | 附属バイオメディカルリサーチセンター 脳神経内科学講座 | 助教 | 今 智矢 | 附属脳神経血管病態研究施設 脳神経内科学講座 助教 |
| R6.1.1 | 附属バイオメディカルリサーチセンター 分子生体防御学講座 | 助教 | 多田 羅 洋太 | 附属高度先進医学研究センター 分子生体防御学講座 助教 |
| R6.1.1 | 附属バイオメディカルリサーチセンター 分子生体防御学講座 | 助教 | 葛西 秋宅 | 附属高度先進医学研究センター 分子生体防御学講座 助教 |
| R6.1.1 | 附属バイオメディカルリサーチセンター 分子病態病理学講座 | 助教 | 竹内 祐貴 | 分子病態病理学講座 助教 |
| R6.1.1 | 附属バイオメディカルリサーチセンター 血管・炎症医学講座 | 助手 | 立崎 真幸 | 附属脳神経血管病態研究施設 脳血管病態学講座 助手 |
| R6.1.1 | 附属バイオメディカルリサーチセンター 脳神経内科学講座 | 助手 | 渋谷 絵里 | 附属脳神経血管病態研究施設 脳神経内科学講座 助手 |
| R6.1.1 | 附属バイオメディカルリサーチセンター 分子病態病理学講座 | 助手 | 佐々木 崇矩 | 分子病態病理学講座 助手 |
| R6.1.1 | 附属バイオメディカルリサーチセンター 分子病態病理学講座 | 助手 | 櫛引 英恵 | 分子病態病理学講座 助手 |

【任命】

| 発令日 | 所 属 | 職 名 | 氏 名 | 異 動 先 等 |
|--------|--------------------|-------|------|--------------|
| R6.1.1 | 附属バイオメディカルリサーチセンター | センター長 | 伊東 健 | 分子生体防御学講座 教授 |

【辞職】

| 発令日 | 所 属 | 職 名 | 氏 名 | 異 動 先 等 |
|----------|-------------|-----|-------|----------|
| R5.12.31 | 脳卒中・血管内科学講座 | 講師 | 下田 祐大 | 下田クリニック |
| R5.12.31 | 循環器腎臓内科学講座 | 助教 | 對馬 迪子 | 大館市立総合病院 |

臨床教授・臨床准教授新規称号付与者 (令和5年12月1日付)

| 称 号 | 氏 名 | 所 属 | 期 間 |
|------|-------|---------------------------------|----------------------|
| 臨床教授 | 嶋村 則人 | 独立行政法人国立病院機構 弘前総合医療センター 脳神経外科部長 | 令和5年12月1日～令和8年11月30日 |

● 附属病院所属

【昇任】

| 発令日 | 所 属 | 職 名 | 氏 名 | 前 所 属 |
|---------|------------------|-----|-------|---------------------|
| R5.12.1 | 周産母子センター | 講師 | 小林 完 | 小児外科 助教 |
| R5.12.1 | 消化器外科、乳腺外科、甲状腺外科 | 講師 | 長瀬 勇人 | 消化器外科、乳腺外科、甲状腺外科 助教 |
| R6.1.1 | 内分泌内科、糖尿病代謝内科 | 助教 | 濱浦 季穂 | 内分泌内科、糖尿病代謝内科 助手 |
| R6.1.1 | 皮膚科 | 講師 | 六戸 大樹 | 皮膚科学講座 助教 |

【採用】

| 発令日 | 所 属 | 職 名 | 氏 名 | 前 所 属 |
|--------|------------------|-----|-------|---------------------|
| R6.1.1 | 消化器外科、乳腺外科、甲状腺外科 | 助教 | 原 裕太郎 | 消化器外科、乳腺外科、甲状腺外科 医員 |
| R6.1.1 | 放射線診断科 | 助教 | 角田 晃久 | 青森県立中央病院 |
| R6.2.1 | 産科婦人科 | 助教 | 當麻 絢子 | 弘前総合医療センター |
| R6.2.1 | 病理部 | 助教 | 鈴木 俊顕 | 病理部 医員 |
| R6.2.1 | 脳神経内科 | 助手 | 三上 洋平 | 脳神経内科 医員 |

【辞職】

| 発令日 | 所 属 | 職 名 | 氏 名 | 異 動 先 等 |
|----------|--------|-----|--------|------------|
| R5.12.31 | 脳神経内科 | 助手 | 引地 浩基 | 八戸市立市民病院 |
| R5.12.31 | 放射線診断科 | 助教 | 辰尾 宗一郎 | 弘前総合医療センター |
| R5.12.31 | 産科婦人科 | 助手 | 對馬 立人 | 弘前総合医療センター |

診療教授等新規称号付与者 (R5.12 ~ R6.2)

| 称 号 | 氏 名 | 所 属 | 期 間 |
|-------|-------|------------|----------------------|
| 診療准教授 | 工藤 直美 | 耳鼻咽喉科頭頸部外科 | 令和5年12月1日～令和8年11月30日 |

お悔やみ

弘前大学名誉教授(元消化器血液内科学講座教授) 吉田 豊 氏には、令和五年十二月十九日に逝去されました。享年九十歳。ここに、謹んで哀悼の意を表し、御冥福をお祈りいたします。

季節は巡り、出会いと別れの春が参ります。座学からクリニカルワークシッ プに移行する医学生、国家試験を終えて初期研修医とステップアップする先生方、人事異動により新しい環境へ移られる先生方、どうぞ新天地でのご活躍を祈念いたします。今年度もまた、尊敬する多くの先生方が退官されます。ご指導ご鞭撻を賜ったことに心から御礼申し上げます。



編集後記

本号には、沢山の受賞報告記事が掲載されました。先進的な研究業績から若手医師の活躍、優れた診療技術認定、令和五年度の弘前大学学術賞をはじめとする弘前大学関連表彰等、沢山の先生方の活躍をご覧ください。特に、「女性アスリート外来開設」により診療科を横断して包括的に女性アスリートをサポートする活動と、「新型コロナウイル ス感染対策」を三年以上にわたり不眠不休で尽力いただいた感染制御センターの活動が医学部附属病院診療奨励賞(診療技術賞)を受賞したことは個人的にも大変うれしく思いました。さらに同(心)のふれあい賞)では、季節を彩る作品や人気キャラクター、童話等を精巧に折り紙で制作し、内科ブロックを彩った阿保副看護師長が表彰されました。病院という特殊な空間で、不安で陰鬱な気持ちで待ち時間を過ごしている患者様にとって、心をなせる癒しでありました。